

小井川潤次郎と南部菱刺し — 文献資料から見る復興活動 —*

川守田 礼子†

Nambu Diamond Embroidery and the works of Junjiro KOIKAWA — Reconstruction activities considered from literature —

Reiko KAWAMORITA

ABSTRACT

"Nambu Diamond Embroidery" in the southern part of Aomori prefecture is a traditional handwork that supported the clothing life of rural areas. Although it was on the verge of extinction due to modernization after the Meiji era, it was reconstructed with the efforts of local volunteers affected by the Mingei (folk crafts) movement. In this paper, I mainly analyze the works of Junjiro KOIKAWA, who is the central figure of the reconstruction activities, especially, the "Michinoku no Zoukei, Hishizashi-hen" serially published in To-o Nippo and Significance of Junjiro KOIKAWA's efforts explore the transformation of the clothing life and Nambu Diamond Embroidery in the southern part of Aomori prefecture in the Showa era.

Key Words: Junjiro KOIKAWA, Nambu Diamond Embroidery, reconstruction activities, literature, clothing culture

キーワード: 小井川潤次郎, 南部菱刺し, 復興活動, 文献資料, 衣生活文化

1. はじめに

青森県伝統工芸品の南部菱刺し(写真1)は、八戸市を中心とする南部地方で江戸時代に発生した。青森県庁ホームページ「青森県の伝統工芸品 南部菱刺し」解説[1]によると、麻の着物しか着用できなかった当時の農民が、麻布に木綿糸を刺し衣類の補強保温を図ったもので、経糸の偶数目を拾って規則的に刺すことで形成される菱型の幾何学模様が特徴である。麻中心の農村の衣生活を支えてきた南部菱刺しという伝統の手仕事は、明治以降の近代化に伴い地方の衣生活文化が劇的に変化すると、衰退の一途をたどった。しかし、大正15年(1926)に始まった柳宗悦らの民藝運動[2]の影響により、昭和初め頃に復興活動が起こった。南部菱刺しの復興活動を牽引した中心人物に

* 令和4年10月26日 受付

令和5年2月18日 受理

† 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

八戸市の民俗学者、郷土史家の小井川潤次郎（以下、小井川と略す）がいる（写真2[3]）。

小井川は、南部菱刺しの復興活動について記した文章を残している。南部菱刺しに関する文献資料が少ない中、当時の南部菱刺しを取り巻く状況を確認できる小井川の著作物は貴重である。特に、青森県の地方新聞『東奥日報』に約10か月間連載した「みちのくの造形 菱刺し編」（図1[4]）は、小井川の南部菱刺しに関する文献資料としては最も分量が多いものである。ほかにも小文が『小井川潤次郎著作集』や民藝関連の冊子に収録されている。しかし、南部菱刺し文献資料としてまとまっておらず、年次的に整理されていない。

本研究では、まず小井川執筆の南部菱刺し文献資料を年次的に整理し、小井川の南部菱刺し研究の歩みを把握する。そして新聞連載「みちのくの造形 菱刺し編」の分析、および、複数の文献資料との相互検証を行うことで、南部菱刺しに関する小井川の取り組みや考え方を明らかにし、その活動意義について考察する。さらに、明治末から昭和40年代までの日本全体および青森県南部地方の社会動向、特に衣生活文化の移り変わりとは照合しながら、当時の南部菱刺しの様相および小井川の南部菱刺し復興活動との関連性について探る。



写真1 南部菱刺し
(八戸市博物館蔵、筆者撮影)



写真2 小井川潤次郎
(八戸市役所[3])

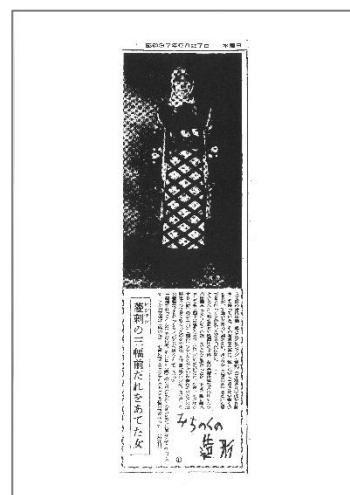


図1 「みちのくの造形 菱刺し編」
連載第1回 1962年6月27日
(東奥日報社[4])

2. 小井川潤次郎について

小井川潤次郎（明治21年（1888）～昭和49年（1974））について紹介する。

八戸市役所ホームページ「八戸市ゆかりの先人たち 小井川潤次郎」[3]によれば、小井川は八戸市生まれ、小学校教員を務める傍ら、柳田國男の民俗学の影響を受け、八戸郷土研究会を創設し、同研究会を拠点に、郷土史や民俗学に関する研究を行った。青森県文化財専門委員、八戸市史編纂委員、根城史跡保存会長などを歴任し、これらの功績により、昭和30年（1955）に第8回東奥賞、昭和41年（1966）に第8回青森県文化賞を受賞している。

『青森県史 民俗編 資料南部』「II部 民俗研究のあゆみ」の小井川潤次郎の解説[5, p.538]より、

1. 八戸郷土研究会を組織し、その中心的役割を担ったこと
 2. 研究対象は多様多岐に及び著書も多数多岐に及ぶこと（八戸郷土研究会からの出版が主体）
 3. 特に民間信仰のオシラサマやイタコの研究に熱心で、全国的に名が知られる要因になったこと
 4. 地方にあってひたすら郷土研究に邁進する姿から柳田國男に「孤高の人」と評されたこと
- などが分かる。ほか、『青森県史 民俗編 資料南部』[5]では南部地方の民俗研究概説、オシラサマやイタコなどの民間信仰、昔話・世間話などの口承文芸等の項に、『青森県史 資料編 近現代』[6-8]では地方の大衆文化や戦後文芸、郷土誌の項に、『青森県史 文化財編 美術工芸』[9]では近代工芸の彫刻・漆工芸・染織工芸の項に、それぞれ小井川潤次郎に関する記述がある。なお、これらの文献は「青森県史デジタルアーカイブシステム」[10]で閲覧できる。

小井川は、青森県の近代化に業績を残した人物の一人として多くの人物史書に取り上げられている。「民俗学に業績の郷土研究家」[11, p.244]、「北奥民俗学の巨星一光彩放つ膨大な論考」[12, p. 222]、「郷土を愛し続けた民俗学の先覚者」[13, p.104]、「モンペ先生と親しまれ」[14, p. 37]等の見出しからも小井川の研究業績と人柄の一端がうかがえる。『母校賛歌 八戸高校物語』には青森県立第二中学校卒業生である小井川の業績が記されている[15, pp.103-106]。

小井川の研究成果は、没後息子の小井川洋夫によって整理され、『小井川潤次郎著作集』全11巻[16-26]が刊行されている。江刺家均は未収録・未整理の論考を『稿本 小井川潤次郎遺文』全3篇[27]にまとめるとともに、『小井川潤次郎攷序説』[28]で小井川的全業績の総括を行っている。

また、小井川が執筆した自伝「民俗学者 小井川潤次郎自伝①」が、戦後八戸初の総合雑誌『北方春秋』15号に掲載され、誕生から八戸中学卒業までが記されている[29, pp.70-84]。当初3回の連載の予定だったものが、理由は不明だが初回のみで終了している。ほかに、『八戸の四季』「あとがき」に八戸の習俗とともに自身の半生を随想風に綴っている[30, pp.138-142]。

以上の資料を参照し、小井川の活動を略年表にまとめる(表1)。なお、時代背景の把握のために、八戸地域の歴史・文化総合 WEB サイト「はちのへヒストリア」[31]掲載の「日本の年表」および「八戸の年表」を参照し、日本国内および八戸の主な出来事を付した。『小井川潤次郎著作集第2巻』巻末に掲載されている小井川作成の「八戸郷土年表」[17, pp.222-225]も参考とした。なお、八戸郷土研究会の創設年には諸説ある。本表では八戸市役所の小井川解説文[3]および「はちのへヒストリア」[31]記載内容にしたがって大正4年(1915)としたが、『青森県史 民俗編 資料南部』では昭和3年(1928)結成としている[5, p.544]。

表1をみると、小井川の民俗学研究の開始は全国的にも早く、先見性が高いといえる。また、研究分野の多様性による地域への影響力が大きい。民俗学研究のほか、地域の自然や史蹟研究にも熱心で、種差海岸の国の名勝指定、根城城址や是川遺跡の国の史蹟指定に小井川の研究が大きく貢献した。ほかにも、えんぶり、民謡などの郷土芸能、八幡馬、南部菱刺しの伝統工芸など、いま地域の文化資源、観光資源とみなされているほとんどのものに小井川が関わっていたことが分かる。

表1 小井川潤次郎 略年表

元号年	西暦年	年齢	小井川潤次郎の主な活動	八戸の出来事	日本の出来事
明治21	1888	0	3月21日八戸十六日町に誕生	八戸町大火、翌年八戸町誕生	
明治24	1891	3		日本鉄道東北線上野青森間全通	
明治27	1894	6	八戸尋常高等小学校	八戸支線開通	日清戦争開始(~1895)
明治34	1901	13	青森県立第二中学校(現・八戸高校)	『八戸商報』創刊	治安警察法公布、義和団事件
明治38	1905	17	『白銀ころばし』『甚句』『あいや節』など民謡研究開始		日露戦争(1904~)
明治40	1907	19	県立第二中学校卒業、青森師範学校進学	翌年『奥南新報』創刊	
明治42	1909	21	青森県師範学校本科第二部卒業、湊尋常高等小学校赴任	郵便局間で電話回線開通	
明治43	1910	22	腸チフス罹患	八戸水力電気株式会社設立	柳田國男『遠野物語』刊行
明治45	1912	24	新井田尋常高等小学校・五戸尋常高等小学校赴任	電灯が普及し工業振興に貢献	明治天皇崩御
大正2	1913	25		大凶作・不漁、東北振興会発足	大正政変
大正3	1914	26		島守発電所送電開始	東洋紡績設立、第1次世界大戦
大正4	1915	27	八戸郷土研究会創立	榎引八幡宮甲冑2領が国宝指定	大戦景気(~1918)
大正10	1921	33	『奥南新報』俳壇・歌壇選者	羽仁もと子自由学園創設	ワシントン会議開催
大正11	1922	34	『奥南新報』連載「伝説行脚(榎引遍路)」	蕪島が国の天然記念物指定	
大正12	1923	35	三戸郡教育會湊分會結成	新田川導水路工事竣工	関東大震災
大正13	1924	36	長者山麓の町営住宅に居を移す(虎杖園)	八戸大火	
大正14	1925	37	三戸郡教育會湊分會機関紙『潮鳴』創刊	小中野大火	ラジオ放送開始
昭和2	1927	39	『三戸郡誌 第四篇 歌謡篇』刊行	青森県八戸商業学校設立	金融恐慌
昭和4	1929	41	『奥南新報』に民俗レポートや論考を発表	八戸市誕生	
昭和5	1930	42	折口信夫が小井川潤次郎宅を訪問	八戸港、内務省指定港湾となる	昭和恐慌(前年世界恐慌)
昭和6	1931	43		冷害による大凶作	満州事変
昭和7	1932	44	『工藝』に南部菱刺し紹介、「菱刺しほどきの會」開催	八戸観光協会設立	血盟団事件、満州国建国
昭和9	1934	46	『館村誌 年中行事篇』刊行	凶作、男女問わず出稼ぎが増加	日本民藝協会創設
昭和10	1935	47	「民間伝承の会」(後の日本民俗学会)創立に参加		
昭和12	1937	49	種差海岸の名勝指定に研究貢献	種差海岸が国の名勝指定	盧溝橋事件(日中戦争開始)
昭和14	1939	51			第二次世界大戦勃発(~1945)
昭和15	1940	52		八戸商工会議所設立	
昭和16	1941	53	根城の史跡指定に研究貢献	根城址が国の史跡に指定	太平洋戦争(~1945)
昭和18	1943	55	田面木尋常小学校校長退職、新井田城跡史跡指定のための活動	能田多代子『村の女性』刊行	ガダルカナル島撤退、学徒出陣
昭和20	1945	57			ポツダム宣言受諾(終戦)
昭和21	1946	58	八戸郷土研究会機関誌『いたどり』創刊、『八戸郷土叢書』刊行、『民俗展望』創刊、これらに自身の論考を次々とまとめる	八戸商工会議所再設立	日本国憲法公布、第二次農地改革
昭和25	1950	62	『八戸郷土研究会月報』発行	朝鮮特需、安藤昌益研究活発に、上水道給水開始	朝鮮戦争(~1953)、文化財保護法公布
昭和26	1951	63	『柳田國男先生古稀記念文集 日本民俗学のために』に「オシラサマの鈴の音」収録	八戸港、重要港湾に指定	サンフランシスコ平和条約・日米安保締結
昭和27	1952	64	日本民俗学会名誉会員	八戸市教育委員会発足	サンフランシスコ平和条約発効
昭和30	1955	67	第8回東奥賞(東奥日報社)		高度経済成長期(~1973)
昭和32	1957	69	是川遺跡の史跡指定に研究貢献	是川遺跡が国の史跡指定	
昭和33	1958	70	『講座日本風俗史 第3巻』に「青森風土記」収録	八戸文化協会発足	岩戸景気(~1961)
昭和34	1959	71	『大館村誌』刊行	『北方文学』創刊	
昭和36	1961	73	『八戸の四季』刊行	三浦哲郎『忍ぶ川』芥川賞受賞	ベトナム戦争(~1973)
昭和37	1962	74	『東奥日報』「みちのくの造形 菱刺し編」連載(~1963)		
昭和39	1964	76	『北方春秋』15号に自伝を寄稿、『八戸の民芸』刊行	新産業都市指定	東京オリンピック開催
昭和40	1965	77	『八戸覚え書』刊行	八戸港が木材輸入特定港に指定	日韓基本条約
昭和41	1966	78	第8回青森県文化賞を受賞、青森県文化財専門委員、八戸市史編さん委員・監修者、根城史跡保存会長などを務めた	八戸市環境衛生課に公害係新設	いざなぎ景気(~1970)、国立劇場開館
昭和43	1968	80	「文化財の調査・指定保護に尽くした」として勲五等瑞宝章を受章	十勝沖地震津波、丸光百貨店・緑屋開店	文化庁発足、川端康成ノーベル文学賞
昭和45	1970	82	『定本柳田國男集』月報に「柳田先生の見えられた前後」寄稿	八戸市民大学講座開設	三島事件
昭和47	1972	84		第一次八戸市総合計画策定	沖縄返還、列島改造論
昭和49	1974	86	死去		

資料：『青森県人名大事典』・『小井川潤次郎著作集』・「はちのへヒストリア」等をもとに筆者作成。

3. 小井川潤次郎の南部菱刺し文献資料

3.1 南部菱刺しの復興活動概要

南部菱刺しの復興活動の歴史に関しては、青森県史編さん文化財部会が平成8年(1996)から約10年間実施した青森県染織工芸調査に基づき刊行した『青森県史文化財編 美術工芸』[9]に詳しい記述があることは、拙稿「南部菱刺しの現状と課題—地域の伝統文化の継承と活性化に向けて—」で述べた[32, p.14]。本稿では、『青森県史文化財編 美術工芸』「第2節 染織工芸」[9, pp.446-524]を参照し、南部菱刺し復興の概略を述べておく。

寒冷地の青森県には綿花が育たず、農民の衣類統制により、農村地帯では大麻(おおあさ)を栽培し、糸を作り、布を織って生活着に加工していた[5, pp.119-122]。柳田國男著『木綿以前の事』に、東北の普段着に用いる頑丈な麻布をヌノと呼び、木綿で織ったモメンと区別したという記述がある[33, pp.26-27]。これは東北の衣生活の主流が麻であったことを示している。麻布の粗い布目を木綿糸(カナと呼ぶ)で細かく刺してふさぐ、他地域から流入した貴重な古手木綿を麻布の裏に付けてつづれ刺しをするなどして衣服の保温性を高め、補強した技術が南部菱刺しである[9, p.466-470]。

近代以降、青森県の衣生活および南部菱刺しは大きく変化した。決定的な出来事は、明治24年(1891)の東北本線上野・青森間全線開通と、昭和23年(1948)大麻取締法による麻の栽培禁止である。明治期の鉄道開通で広域的流通が活性化し、南部地方に多様な物資が運ばれるようになると、温かく丈夫な木綿布が入手しやすくなり、衣料として急速に普及し、刺し子着は生活着としての役割を終えた[9, p.450]。明治末を境にこぎん刺しは作られなくなったという[9, p.468]。同時期に南部菱刺しも廃れ始めるが、南部地方では麻織りが大正期、昭和初期まで続いた[9, p.468]。しかし昭和期の大麻取締法により大麻の栽培が禁止されると、南部地方の農村地帯の衣服自給生活を長く支えてきた麻栽培・麻糸績み・麻織りは完全に途絶える。農家で麻織物は作られなくなり、麻布の強度や保温性向上のために手間をかけて刺し子をする必要はなくなり、生活に密着した衣類保全技術としての南部菱刺しの役割は失われたのである。

南部菱刺しの細かい連続模様は、衣類の保温補強の効果を最大限に高めるという実用的な必然性から発生しているが、装飾的効果も上げている。この実用と装飾の両面は南部菱刺しの価値として不可分の関係にあると考えられる。しかし、近代以降、江戸期の衣料制約下における麻布の加工という実用的意義が失われると、生活着の装飾性を高める目的のみでわざわざ刺し子を行うことはしなかった。紺や縞など、刺し子に変わる装飾性を有した繊維製品が新たに入手できたからである。衣生活文化の近代化に伴い、南部菱刺しの実用・装飾両面の価値は忘れ去られようとしていた。そのとき、「用の美」という価値観のもと、再びその価値を掘り起こし、再認知させる契機となったのが民藝運動といえるだろう。

大正15年(1926)に始まる民藝運動の創始者である柳宗悦は、全国各地に存在する無名の職人が製作した日常の生活道具を「民藝(民衆的工芸)」と名付け、「用の美」を唱えた[2]。優れた民藝品を求めて全国で蒐集活動を行った柳宗悦は、青森県の染織品として「刺し子着」(こぎん刺し、南部菱刺し)を取り上げ、地元で製作物収集と製作復興を呼びかけた。これを受け、昭和初期、津軽地

方では村岡景夫、高橋一智、相馬貞三が、南部地方では小井川潤一郎が中心となって、農村地帯に残っていた製作物の保存収集、伝統技術の継承や新規製作者の育成活動を推進した[9, pp.502-504]。一度消滅しかけていた伝統技術が現在に命脈を保つのは、この復興活動によるところが大きい。

小井川は、民藝運動の柳宗悦や相馬貞三、農閑工芸研究所の大川亮らとの交流から、本格的に南部菱刺しの復興活動に取り組むようになった。その後、小学校の同僚教員に技術習得と製作を勧め、八戸市内で菱刺し講習会を開催している[9, pp.497-498]。小井川が注力したのは、伝統文化存続のための後進育成と伝統技法の継承である。また、南部菱刺しを広く紹介するために、柳宗悦の勧めに応じて、展覧会出品や新製品の開発に着手し、東京方面への製品販売にも取り組んだ[9, p.504]。

3.2 小井川潤次郎による南部菱刺し文献資料一覧

小井川執筆の著作物（新聞記事含む）を調査し、南部菱刺しに関するものを抽出し、刊行年順に一覧にまとめる（表 2）。本研究での文献収集は、国立情報学研究所運営の学術情報データベース CiNii[34]、国立国会図書館サーチ[35]を用いて検索を行ったほか、青森県郷土資料を有する青森県立図書館[36]、八戸市立図書館[37]、八戸工業大学図書館[38]等で所蔵文献資料の閲覧調査を行った。

文献資料は 16 件あった。刊行年に着目すると、1930 年代の No.1～9 と、1950 年～60 年代の No.10～16 の二つの大きなまとまりがあることが特徴的である。No.3～8、11、12 は新聞掲載記事である。表題が同一の No.13、15、16 を確認すると同内容であったため、No.13 を初出とする。『小井川潤次郎著作集』収録資料 No.10、14、15 は、著作集の刊行年ではなく資料の初出年を記載した。

以上を整理し、16 件の資料内容を簡単にまとめた一覧表を提示する（表 3）。記述内容の相互検証など詳しい分析は次章で行う。小井川の文献資料以外の南部菱刺し文献資料に関しては、拙稿「青森県の刺し子『南部菱刺し』に関する文献研究」[39]にまとめている。

なお、直接内容を確認できなかった資料は、表 2、表 3 から除いた。小井川の記述によれば、『奥南新報』掲載記事が他にもあるようだが（昭和 6 年（1931）6 月 23 日付、昭和 7 年（1932）9 月 30 日付）、『奥南新報』を唯一所蔵している八戸市立図書館のマイクロフィルムを調査した結果、該当日付の新聞が欠落していることが分かった。

同紙には小学校における菱刺し講習会開催の記事が 2 件あった（昭和 7 年（1932）9 月 22 日、25 日付）。小井川が執筆した記事なのか不明のため表 2、表 3 から除いたが、小井川関連の菱刺し復興活動として第 5 章表 5 には記載した。また、No.8 に関して、同じ頒布会の告知が同紙昭和 8 年（1932）1 月 19 日付にも掲載されているが、南部菱刺しへの言及がないため表 2、表 3 には含めず、第 5 章表 5 にのみ記載した。

このほか、柳宗悦と小井川の間で南部菱刺しに関する書簡のやりとりが頻繁にあったことがわかっている[9, p.504]。柳に宛てた小井川の書簡は日本民藝館に所蔵されているが、非公開で閲覧が許可されなかったため内容確認ができず、表 2、表 3 には含めなかった。柳宗悦が小井川に宛てた書簡は『柳宗悦全集 21 上』[40]、『柳宗悦全集 21 中』[41]に収録されており、参考にした。

表2 小井川潤次郎 南部菱刺し文献資料一覧

No.	タイトル	刊行年月日	書名・新聞名	掲載 頁・面	発行者 (資料所蔵先)
1	南部の春	1931.11.1	郷土誌むつ 第2集 [42]	118-122	陸奥郷土会 (八戸市立南郷図書館)
2	南部の「菱ざし」	1932.2	工藝 第14号 [43]	51-57	聚楽社 (つがる工芸店)
3	工藝展覧會を開くについて(上)	1932.2.25	奥南新報 [44]	1	奥南新報 (八戸市立図書館)
4	工藝展覧會を開くについて(下)	1932.2.28	奥南新報 [44]	1	奥南新報 (八戸市立図書館)
5	菱刺しほどきの會 —八戸郷土研究会—	1932.7.13	奥南新報 [45]	1	奥南新報 (八戸市立図書館)
6	菱刺しほどきの會 —八戸郷土研究会—	1932.7.22	奥南新報 [45]	1	奥南新報 (八戸市立図書館)
7	縦と横と —菱刺し小考—	1932.10.19	奥南新報 [46]	3	奥南新報 (八戸市立図書館)
8	久慈焼の事から —頒布會のこと—	1933.1.13	奥南新報 [47]	1	奥南新報 (八戸市立図書館)
9	2 ヒシマヘダレ(青森県)	1937.5	民具問答集 [48]	4-15	アチックミュージアム(青森県立図書館)
10	ヌノツヅレ・コギン・ヒシザシ (青森風土記)	1958.9	小井川潤次郎著作集 第七巻 南部の民俗 [22]	29-30	木村書店 (八戸市立図書館)
11	布目を追うて—ヒシザシ雑記	1962.6.20	東奥日報 [49]	5	東奥日報社 (東奥日報社)
12	みちのくの造形 菱刺し編	1962.6.27 ～ 1963.3.31	東奥日報 (34回連載) [4]	—	東奥日報社 (東奥日報社)
13	ひしざし—菱刺し	1964.3	八戸の民芸 文化財シリーズ4 [50]	6-7	八戸市教育委員会 (青森県立図書館)
14	八戸の民芸	1964.3	小井川潤次郎著作集 第二巻 八戸をめぐる [17]	213-215	木村書店 (八戸市立図書館)
15	ひしざし—菱刺し (八戸の民芸)	1964.3	小井川潤次郎著作集 第二巻 八戸をめぐる [17]	222-225	木村書店 (八戸市立図書館)
16	ひしざし—菱刺し	1967.1.31	みちのく民芸 第12号 [51]	2-3	青森県民芸協会 (つがる工芸店)

注) No.13、15、16 は同一内容のため、No.13 を初出とする。

資料：『小井川潤次郎著作集』・『奥南新報』・『東奥日報』等をもとに筆者作成。

表3 小井川潤次郎 南部菱刺し文献資料の主な内容

No.	タイトル	主な内容	ポイント
1	南部の春	第1集掲載の大川亮「古錦の話」を受け、「ふしざし」(菱刺し)や「ひすまいだれ」(菱前垂)のことを書こうと思ったが忙しすぎて後回しにするという一文のみに南部菱刺しに関する言及がある。	・第1集、第2集は「戀川潤」名で投稿

2	南部の「菱ざし」	こぎん・菱刺し特集号に、柳宗悦「本號の挿繪」、村岡景夫「津輕の『刺しこぎん』」に続き菱刺し解説を掲載。伝統的な菱刺しの要素(地布と糸、模様構成、菱模様の名称、地刺し)、三幅前垂(菱前垂)の構造と分布、復興活動の経緯と製作協力者の紹介。文様図案掲載。	<ul style="list-style-type: none"> ・菱刺繍と記述 ・柵刺という男の前垂がある ・図案が天地逆
3	工芸展覧會を開くについて(上)	工芸展覧會開催の目的と開催宣言。大川亮、杉山壽榮男、芹沢銈介、村岡景夫、柳宗悦らとの交流や『工藝』掲載が契機。地元での工芸品の評価や待遇の低さを憂い、凶作や不況対策の副業品展覧會として計画。地元の工芸品として菱刺し、裂織、久慈焼、漆器が挙がる。	<ul style="list-style-type: none"> ・換金が主目的ではなく「手の工芸」を考えるためと主張
4	工芸展覧會を開くについて(下)	No.3の続き。手の工芸の重要性と小学校の表面的手工教育に対する批判。土地の物には手をつけようとしない地元の傾向を打開し今後の方法を探るため、中絶しそうな手の工芸の伝統を再興する好機と判断し展覧會を開催。末尾記載の2月23日夜が実際の執筆日か。	<ul style="list-style-type: none"> ・教育会にも協力要請 ・郷土教育に関する言及がある
5	菱刺し手ほどきの會 —八戸郷土研究会—	7月17日第1回菱刺し手ほどきの會開催告知。会場は八戸澤里の泉山岩次郎宅。目的は農村の副業だが、まずは八戸の子女に指導して農村に波及するのが楽かと考えた。菱刺しの話の小井川が担当、女性3~4人が実習を行う。1回開催したら後は有志に託すと述べる。	<ul style="list-style-type: none"> ・国展、工芸展覧會作品がある ・「私と菱刺の縁切り」と述べる
6	菱刺し手ほどきの會 —八戸郷土研究会—	7月24日第2回菱刺し手ほどきの會開催告知。会場は泉山宅、午前9時から午後4時まで。会費不要、前回参加者は材料持参、新規者には会で準備する。30~40分の話の小井川が担当。	<ul style="list-style-type: none"> ・前回同様、「幹事小井川」と記載
7	縦と横と —菱刺繍小考—	津輕のこぎんと南部の菱刺しの源流は同じで、布目の縦と横の相違、縦あいすげと横あいすげという手法の相違であるとした。「用」がこの縦と横の発達を支配した。この見解は、作品の収集や観察のみでなく、実践した結果によるものとする。10月16日夕執筆と記載。	<ul style="list-style-type: none"> ・上部の菊と菱刺しのカット図案は杉山寿栄男によるもの
8	久慈焼の事から —頒布會のこと—	1月21日自宅での工芸品頒布會開催告知。小井川の自宅、虎杖園で毎月開催する八戸郷土研究会例会「二十一の會」で行う。今月は小久慈焼中心。次月以降も継続予定で菱刺しの財布も出品検討とある。	<ul style="list-style-type: none"> ・工人の作業進度や賃金の問題に言及している
9	2 ヒシマヘダレ (青森県)	全国の民具調査で、小井川は青森県の1.カツコベと2.ヒシマヘダレについて報告(一問一答形式)。小井川所蔵の下長苗代採集の菱前垂、前垂寸法図、梅の花刺し方図案と表を掲載。菱前垂の呼称・構造(寸法・模様構成・色彩)・用途・着用方法、採集物の製作者・産地、菱模様の種類、刺し方(作業時間帯・所要時間・図案)、教育状況など。	<ul style="list-style-type: none"> ・詳細な内容 ・小井川報告の刺し方表に基づきグラフを作成して掲載
10	ヌノツヅレ・コギン・ヒシザシ	農家の衣類は麻布(ヌノ)で、布目を数えて上げ下げした地刺から多種の文様が発生した。こぎんは縦アヤスギから生まれる大小交錯した菱形を基調とした複合文様、菱刺しは横アヤスギから作られた小さな菱形の連続と記述(No.13、15、16に同内容)。両者とも併に押され衰退。	<ul style="list-style-type: none"> ・菱模様から村を識別と記載 ・模様発生に関する言及がある
11	布目を追うて —ヒシザシ雑記	研究着手や製品販売の頃の思い出、七戸の戸館(戸館第次郎)、宇山(博明)、成田、小原などとの交流(各地で作品を見て歩いている、七戸で見た刺子着物は日本民芸館に収蔵、自身の収集物は物の無い時分に食ってしまった等)について述べる。こぎんと菱刺しの菱模様の違いから南部と津輕の民俗の相違や東西の地域差を知った。昭和11年2月10日見かけた菱前垂の女が街上で見た最後だったと記述(No.12、13、15、16に同内容)。	<ul style="list-style-type: none"> ・総括的内容 ・小井川の収集物の行方が不明

12	みちのくの造形 菱刺し編	10 か月間で計 34 回連載。小題、作品画像、解説文で構成。模様解説や作品解説のほか民俗的な話題が豊富。くずし模様や新規模様に批判的である。自身の活動履歴や人的交流、文献資料等を紹介。	・菱刺し研究の総括として連載
13 15 16	ひしざしー菱刺繍	三幅前垂、菱前垂をあてた女（八戸市田面木の人）、刺子の着物（小川原湖博物館蔵）の図版の後に菱刺し解説文を掲載。麻布や藍染、刺子着物や前垂の名称や模様、分布、こぎん刺しと菱刺しの違いや発生展開の歴史、自身の菱刺し研究経過や文献資料の振り返り。	・総括的な内容
14	八戸の民芸	「八戸の民芸」として、八幡馬、藤右衛門の小絵馬、ヒシザシ（菱刺繍）、久慈焼、奇峯学秀刻むところの仏像の 5 点を挙げ、2～3 行で簡潔に紹介し、次章でそれぞれの解説文を掲載しており、No.15 の前説に相当する。ヒシザシ（菱刺繍）は「刺繍の原子形、麻布に綿糸（あとでは毛糸も）で刺したサシコ、著物・前垂に使った」と記述。	・左 5 点が「現在の八戸の民芸とは相当隔たりのある道を歩いている」と記載

資料：『小井川潤次郎著作集』・『奥南新報』・『東奥日報』等をもとに筆者作成。

4. 新聞連載「みちのくの造形 菱刺し編」について

4.1 概要

「みちのくの造形 菱刺し編」[4]は、東奥日報朝刊に昭和 37 年（1962）6 月 27 日～昭和 38 年（1963）3 月 31 日の 10 か月間、毎週水曜日、計 34 回連載された。小井川の南部菱刺しに関するまとまった著作物として数少ない貴重な資料である。本連載は、74 歳の小井川が、南部菱刺しに関する自らの活動を総括する目的で書かれたものと推測される。『小井川潤次郎著作集』など全集に収録されておらず、単独で書籍化されたものもなく、図書館や新聞社等での公開も行われていないため、一般的に内容確認ができない文献資料である。

本研究では、東奥日報社から直接複写版を取り寄せ、詳細な調査を行う。古い新聞の複写版のため、文字・写真ともに判読が困難な箇所があった。特に写真はモノクロで不鮮明なものが多く、作品資料のクレジットがないため、ほとんどが出所不明である。解説文は全体として随想的・主観的な記述傾向が強く、解釈が難しい箇所もある。南部菱刺し以外の話題、特に南部地方の植物・旧跡・風俗・伝説など専門の民俗学に関わる話題に飛ぶことが多い。

連載全 34 週分（第 1 回～第 32 回、19 回と 20 回が各 2 回ずつあるため計 34 回分となる）の掲載内容をまとめた（表 4）。表 4 における連載回は新聞記事上の表記に従い①、②、③とし、掲載文引用の際も同様に表記した（例 [4,①]）。連載は見出し、写真（主に作品資料画像）と解説文からなる。解説文の内容は写真に掲げた作品資料に関する解説が主であるが、小井川が南部菱刺しについて見聞したこと、考えたこと、連想したことを次々に記述する形式となっている。

各回の解説文を精読したところ、南部菱刺しに関わる話題が多岐にわたっていること、南部菱刺し以外の話題も含まれること、小井川の他の文献資料との関連性が見出された。「みちのくの造形 菱刺し編」の分析を進めるにあたって、小井川が南部菱刺しについて論じる際に共通して取り上げる話題を整理する必要があると考え、表 2、表 3 に示した文献資料の内容と比較したうえで、次のように 10 項目に分類した。これに沿って連載各回の解説文を分類した結果を表 4「解説文の主な内容」欄に示した。

- (1) 品目：菱刺しが施されているアイテムに関わる内容。
- (2) 意匠：模様名称、模様構成、色彩など菱刺しのデザイン性、装飾性に関わる内容。
- (3) 特性：技法、効果など菱刺しの特性、実用性に関わる内容。
- (4) 歴史：発祥、分布など菱刺しの歴史に関わる内容。
- (5) 活動：小井川の菱刺し研究や復興活動に関わる内容。
- (6) 作品評価：掲載写真に対する評価を述べたもの。高評価は (+)、低評価は (-)と表示した。
- (7) 人物：菱刺しに関連して個人名が挙げられているもの。
- (8) 作品資料：掲載写真とは別に、菱刺し作品資料として紹介しているもの。
- (9) 文献資料：菱刺しやこぎん刺しに関連した文献資料として紹介しているもの。
- (10) その他：民俗・自然・文芸など菱刺しとは直接的に関わらない、菱刺し以外の内容。

表4 「みちのくの造形 菱刺し編」掲載内容一覧

回	掲載年月日	タイトル	掲載写真	解説文の主な内容
①	1962/6/27	菱刺の三幅前だれをあてた女	着用写真	品目/意匠/人物：米内山義一郎、田面木の娘/作品資料
②	1962/7/6	梅の花	前垂れ模様	品目/意匠/特性/歴史
③	1962/7/10	梅の花その二	模様拡大	作品評価(-)：菱枠の線の数
④	1962/7/22	梅の花その二	模様拡大	作品評価(-)：菱枠のない模様
⑤	1962/8/4	キジの足その一	模様拡大	意匠/自然/民俗
⑥	1962/8/8	キジの足その二	前垂れ模様	品目/意匠/特性/作品評価(+)/自然
⑦	1962/8/15	キジの足コギンその三	模様	意匠/作品評価(-)：くずしもの
⑧	1962/8/22	キジの足その四	模様拡大	意匠/作品評価(-)：菱枠のない模様
⑨	1962/9/5	クルビザシその一	模様拡大	意匠/自然/民俗
⑩	1962/9/12	クルビザシその二	前垂れ模様	品目/意匠/作品評価(+)/人物：浜田喜四郎/民俗
⑪	1962/10/5	クルビザシその三	煙草入れ(不鮮明)	品目/意匠/歴史(分布)/自然
⑫	1962/10/10	さしこ着その一	上衣前身頃(不鮮明)	品目/意匠/活動/作品評価(+)/作品資料：小川原湖博物館「さしこ着」
⑬	1962/10/21	さしこ着その二	刺子着模様拡大	品目/意匠：キジの足/作品評価(+)/文献資料：奥南史苑/民俗
⑭	1962/10/28	ペゴノクラその四	上衣後見頃拡大	品目/意匠/作品評価(+)/人物：米内山義一郎、二本柳校長/自然
⑮	1962/11/4	さしこの着物その一	上衣後見頃(不鮮明)	品目/意匠：ススキタバネ/文献資料：こぎん刺模様集
⑯	1962/11/11	さしこの着物その二	上衣袖(不鮮明)	品目/意匠：ススキタバネ/作品評価(+)/民俗/自然
⑰	1962/11/18	さしこの着物その三	上衣後見頃拡大	品目/意匠：くずしもの
⑱	1962/11/25	さしこの着物その四	刺子着模様拡大	品目/意匠：菱刺しらしくない模様/特性/作品評価(+)
⑲-1	1962/12/2	さしこの着物その五	刺子着模様拡大	品目/意匠：菱刺しらしくない模様/作品評価(-)
⑲-2	1962/12/9	柳の葉その一	前垂れ模様	品目/意匠/作品評価(+):菱枠のない模様/民俗
⑳-1	1962/12/16	柳の葉その二	手甲	品目/意匠/作品評価(+):菱枠のない模様
⑳-2	1962/12/23	柳の葉その三	前垂れ模様	品目/意匠/特性
㉑	1963/1/13	柳の葉その四	前垂れ模様(不鮮明)	品目/意匠/特性
㉒	1963/1/20	見本帳その一	安政三年の見本帳三枚	品目/意匠/歴史：安政三年製作/人物：新井田秀子、島守静翠居/文芸/民俗
㉓	1963/1/27	見本帳その二	見本帳三枚	品目/意匠/人物：上杉修/作品資料/民俗
㉔	1963/2/3	見本帳その三	見本帳二枚(不鮮明)	品目/意匠/活動/人物：米内山義一郎・盛田達三/作品資料/民俗
㉕	1963/2/10	見本帳その四	小物入れ	品目/活動/人物：夏堀謹二郎
㉖	1963/2/17	綾杉その一	模様拡大	意匠：タテアヤスギ/文献資料：縦と横と/歴史(発祥)/人物：夏堀謹二郎/作品資料
㉗	1963/2/24	綾杉その二	模様拡大(不鮮明)	意匠：タテアヤスギ/歴史(発祥)/自然

⑳	1963/3/3	綾杉その三	模様拡大(不鮮明)	意匠：タテアヤスギ/活動(復興活動)/作品資料/文献資料：工芸十四号
㉑	1963/3/10	綾杉その四	模様拡大	意匠：タテアヤスギ/歴史(発祥)：こぎん刺し、アイヌ/作品資料
㉒	1963/3/17	ソロバンの玉	模様拡大(不鮮明)	意匠/特性/活動(復興活動)/人物：工藤てつ子/文献資料：民具問答集、工芸十四号、コギン刺模様集
㉓	1963/3/24	ソロバンの玉その二	模様二種	意匠/歴史(発祥)/文献資料：弘前のこぎん、むつ
㉔	1963/3/31	東北の春	絵画	歴史(発祥)/活動/人物：妹背平三、高山辰三、山崎さん(山崎斌)、山田よしの、川端康成、戸籍第次郎/作品資料/文献資料：東北の旅、月明/民俗/自然

資料：『東奥日報』『みちのくの造形 菱刺し編』をもとに筆者作成。

4.2 割合

表4「解説文の主な内容」について、全体における各項目の割合をグラフに示した(図4)。最も割合が高いのは意匠 23.4% (30回)、ついで、品目 16.4% (21回)、その他(民俗自然文芸等) 14.8% (民俗10回、自然8回、文芸1回の計19回)、作品評価 10.9% (14回)であった。本連載は、全34回のうち21回の見出しに模様名称を掲げており、南部菱刺しの伝統模様について論じる回が多いため、必然的に意匠、特に模様名称の割合が高い。また、掲載写真に関連して品目の解説や作品資料の紹介がなされているため、品目や作品資料の割合が高い。作品資料がある回には、それに対する作品評価、その資料の製作者・所蔵者などの人物に関して言及することが多い。さらに、模様名称は動植物や生活用具に由来するものが多いため、そこから連想して南部地方の民俗や自然、方言等に言及することが増え、その他の割合が高くなっている。民俗、文芸、自然など南部菱刺し以外の話題が多い点には、民俗学者、俳人・歌人で、植物に詳しい小井川らしい側面がうかがえる。

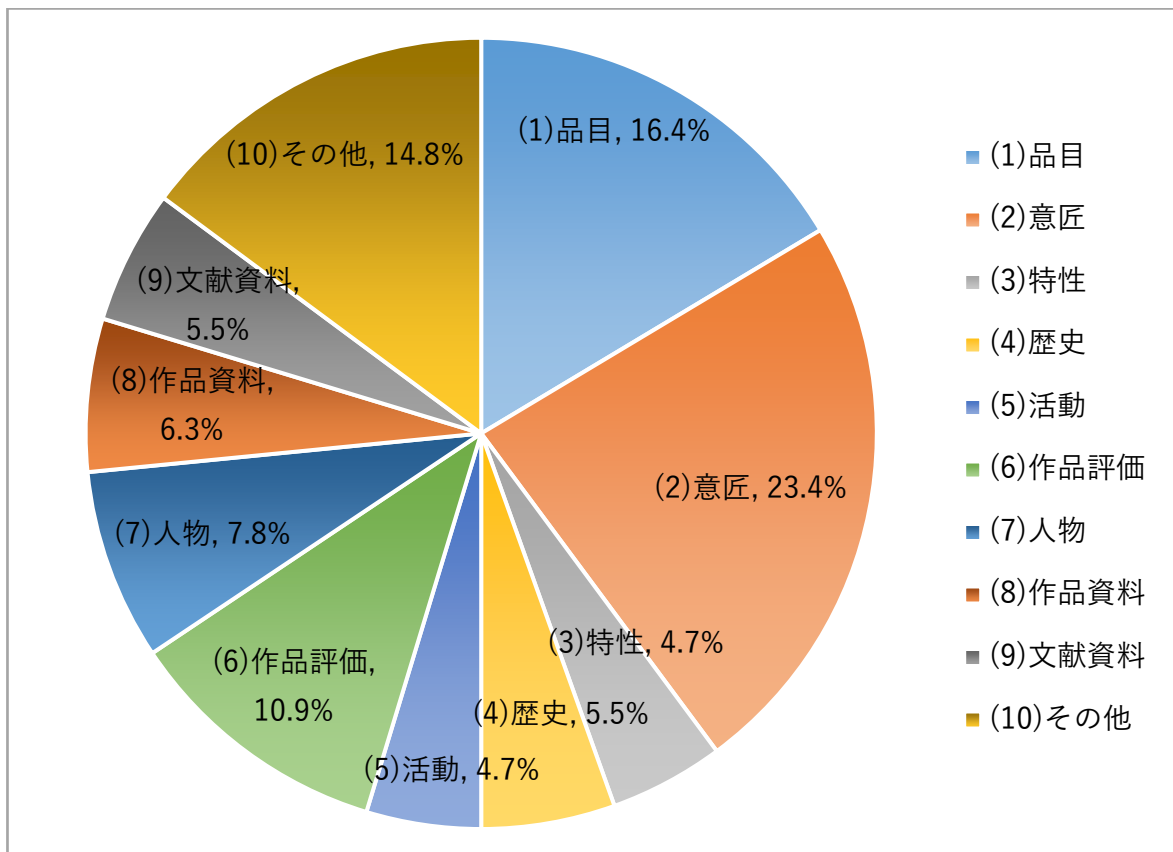


図4 「みちのくの造形 菱刺し編」解説文の内容分類

4.3 内容分析

(1) 品目

連載 32 回中 12 回の見出しが、三幅前垂れ、さしこ着、さしこの着物、見本帳と品目に該当する。掲載写真の解説の中で品目に関する言及があり、意匠、作品評価と合わせて論じられることが多い。前垂れ 7 件、刺子着 8 件、見本帳 3 件、手甲 1 件、煙草入れ 1 件、小物入れ 1 件の計 21 件である。掲載写真がどのような品目の一部なのか説明されていない場合は、表 4「掲載写真」欄に「模様」とのみ記載した。なお、第 1 回に掲載されている実際の着用写真（図 1）は他の事例が少なく貴重なものである。『八戸の民芸』冒頭（表 2 の No.13）に「菱前垂をあてた女（八戸市田面木）」と題し同じモデルによる別アングルの写真が掲載されている[50,口絵]ほか、さまざまな資料で使用されている。たとえば、第 1 回掲載写真と同じものと推察される写真が、昭和 18 年（1943）刊行の本山桂川著『生活民俗図説』の巻頭図版に掲載されており、解説「菱刺の前垂姿」に「八戸市田面木端の女性労働服装は繪のやうに美しい。白布の頭巾と綾も見ごとな菱刺の前垂、手甲も脚絆もきりりとした身だしなみで、働くものの簡素美がここにも遺憾なく發揮されてゐる」[52,p.6]とある。同様の写真は、八戸市中居林地区の衣生活に関する調査結果をまとめた、古里淳「中居林の民俗（その 2）」にも引用されている[53,p.34]。

(2) 意匠

連載 32 回中 21 回の見出しが模様名称ということもあり、意匠の中でも模様名称に言及した記事が 30 件と最も多い。伝統模様の型刺し（単位模様）は「梅の花」「キジの足」「クルビスシ（ベゴノクラ）」「柳の葉」「ソロバンの玉」5 種と、連載当時に増加していたと思われる、伝統模様から派生する応用模様「くずしもの」数種、地刺し模様は「綾杉（アヤスギ）」「ススキタバネ」「クモノイガキ」など数種が取り上げられている。名称の由来や造形的特徴、名称・模様のバリエーションや地域性、美的印象などについて説明している。

模様分類や名称について、他の南部菱刺し文献資料と比較すると、田中忠三郎著『南部つづれ菱刺し模様集』[54]、八田愛子・鈴木堯子共著『菱刺し模様集』[55]、西野こよ著『南部菱刺し』[56]の記載と一部異なる点が見受けられた。例えば、小井川が「ココノツビシ」と呼んだ模様[4, ⑨]は、『菱刺し模様集』では「うろこ紋」に分類され[55,pp.4-5]、解説に「花の紋こ」「六つ菱」「十二の紋こ」という所もあると記載されており[55,pp.4-5]、「このつびし（九つ菱）」分類にはない。『南部つづれ菱刺し模様集』にも同じ模様は「うろこもん」に分類され[54,pp.4-5]、「このつびし」分類にはない。『南部菱刺し』では、最も類似した模様は「ソロバン玉」として記載され、「この菱（九つ菱）」は全く異なる模様であった[56,pp.132-133]。模様名称は製作地域や伝承者によってかなりの違いがあり複雑であることが分かる。

模様構成に関しては 11 件である。「イゲタ（井桁）を四つ作り、その間をいろいろ点や線を変化させている」[4,②]といった前垂れ等の模様構成や、「そでの上半がススキタバネと呼ぶヒシ形にならない連続文様」[4,⑤]など刺子着物の模様構成について述べている。

色彩に関しては 3 件である。南部菱刺しは多色使いの前垂れが特色であるが、意外に色彩に関する説明は少なく、「地はヌノ…麻布、色はシラサギ…白浅黄（中略）フクリンはもめんで、その分が

黒く出ている」[4,⑮]、「後川目では私の覚えていた頃は黄、朱、緑など色あざやかな毛糸で前だれを刺し」[4,⑩]と記すほかは、クモノイガケの色糸についての説明[4,⑳]のみであった。

(3) 特性

南部菱刺しの特性に関する言及は 6 件と少ない。「梅の花は美しいが、作業するとき糸のすいた地布の出たところが弱いので、そこからほころびて物がひっかかるといわれた」[4,㉒]、「(前垂れの) 上にヒシを刺さずに布を柔らかくしておくに縦に横にまた斜めに地刺し、これが『クモノイガケ』」[4,㉖]など模様種による強度や機能、使用感の違いについて述べている。

(4) 歴史

南部菱刺しは江戸時代から作られるようになったとされている[1]が、それを明確に示す文献資料は見つかっていない。第 22 回で紹介される「安政三年（紀元二五〇六年）母さゑ子拾参歳之時刺之」の見本帳[4,㉒]は、南部菱刺し最古の作品資料とされている[9,p.468]。しかし、現在、所在不明で現物を見ることはできず、本記事でのみ、その存在が確認できるという貴重なものである。

分布については、「後川目では（中略）毛糸で前だれを刺し、これが一川目、二川目、三川目、四川目くらいまで行ったのかと思う」[4,⑩]という簡単な記述しか見当たらなかった。分布に関しては他の文献資料に詳しい記載がある[43,p.56、50,p.6]。

こぎん刺しと南部菱刺しの発祥に関する記事は後半に 4 件見られ、小井川の関心が強いことが分かる。こぎん刺しと南部菱刺し、いつ発生したか、いずれが先か、どのように発生したかに関しては、現在も確たる証拠は見つかっておらず不明である。小井川はこれに対し、「コギンもヒシザシもただか二百年そこそこ前に生まれたとは思われなかった」[4,㉓]とし、現存の文献資料による発生年代の特定には疑問を呈している。また小井川は、地刺しであるアヤスギとタテアヤスギの造形上の相違を南部菱刺しとこぎん刺しの発祥に結び付けて考えていた。「アヤスギを台に刺したヒシザシのヒシは、横に長いヒシなのに、タテアヤスギが作るヒシは縦の長いヒシになる。横のがヒシザシ、縦のがコギンと無造作に割り切った私だった」[4,㉗]と記述している。図形的にみた菱形の発生とこぎん刺し・南部菱刺しの発祥に関する仮説であり、非常に興味深い。しかし、後年この仮説が揺らいだことが分かる。きっかけは「よく使いこなしたヒシザシのタテアヤスギの前だれを一枚手に入れてから」[4,㉙]のようだ。南部菱刺しとこぎん刺しの発祥を南部と津軽と別々に考えたことは間違いとし、二つの源流は同じで、八甲田山脈を境にそれぞれ発展した違いであると述べる [4,㉚]。この発祥に関する小井川の結論は「縦と横と一菱刺繡小考一」[46]に書いたと述べている[4,㉞]。

(5) 活動

小井川の菱刺し関連活動の初段階とその展開に関して紹介している記事が 6 件あった。「下長苗代小学校校長になったのが大正 13 年、女の先生に手を付けるように勧めたのがこの時」[4,㉘]とあるように、南部菱刺しの技術習得を同僚の女性教員に推奨したことが記載されている。「(工藤てつ子さんに)『梅の花』の刺し方を四本下 四本下（中略）といった（原文ママ）ぐあいに、布目を追って上げ下げする表を書いてもらった」「アチックミュージアムの『民具問答集』という本には、その表とグラフを図にして載せた」[4,㉚]と記載されている。その後、「復原しようとして刺し方の講習会みたいなものを幾度も開いた」[4,㉜]とあり、一般向けの講習会に展開したことが分か

るが、記事内容だけでは詳細が不明である。また、後進教育と合わせ、小井川は製品開発や東京方面への販売活動を行っていることが分かる。最終回には、座布団・花瓶敷・手文庫・掛け鏡台・財布・がまぐち・卓布など生活雑貨に菱刺しを施した新製品を手掛けたこと、銀座の民芸店「たくみ」に製品を出していたこと、戦争中も何度も上京をしていることを記している[4,⑳]。

しかし、小井川はこうした活動から手を引く。「手を引いて久しくなってから書くそれぞれだった」[4,㉑]とあり、「みちのくの造形 菱刺し編」は小井川が南部菱刺し活動から後退して暫くしてから書かれた文献資料であることが分かる。最終回では「私のヒシザシもここで終わりである」「私のヒシザシ供養のためにである」[4,㉒]と締めくくっている。小井川はなぜ南部菱刺しから手を引いたのか、その理由や正確な時期については記載がない。しかし、その背景には、「地布が荒くぴんとしまっていない」[4,㉓]や「布地が戦後のもので危なっかしい」[4,㉔]など原材料に関する言及、「何事も原（モト）の形をはっきりつかんでいないとつまらないところからくずれだした」[4,㉕]や「近ごろはこんなふうひし一つの文様を考えずに、その文様の中からどこでも構わずに引っこぬいて並べたがった」[4,㉖]など菱の形が崩れた近年の作品に対する評価、「土地の人は新しい方向へ向いて行ってしまい」[4,㉗]、「(菱刺しやこぎん刺しの防空頭巾を見て川端康成が「もったいない」と言ったが) こういうのはよその人、他国の人、土地の人が土地の良さも味もわからないのはきのどくだった」[4,㉘]など当時の風潮に対する言及が関連するのではないかと推測できる。

(6) 作品評価

作品評価は、高評価 (+)と低評価 (-)に分けて表示した。高評価 (+)は9件、低評価 (-)は5件であった。キジの足の連続模様[4,㉙]、浜田喜四郎所蔵の三幅前垂れ模様[4,㉚]、小川原湖博物館のさしこ着[4,㉛]を美しいと高く評価する一方、低評価の作品も紹介されている。

南部菱刺しの技術継承は「見取り学（見て覚える）」によって下図もなしに行われたため、「くずしもの」と呼ばれる模様が多く派生した。たとえば、「キジの足」について、鳥足の形状から逸脱しているくずし模様に対し、「原（モト）の形をはっきりつかんでいないとつまらないところから崩れだした」[4,㉕]と模様由来に合わないアレンジを否定している。小井川は、自由自在の変化は許容としながらも、「私の頭にだけは因業に、ヒシザシは“菱刺し、だと残っている狭い心だった」[4,㉜-2]と菱形に対するこだわりを述べている。「くずしもの」[4,㉗⑰]や、菱枠のない模様や菱枠内の模様を取り出して好き勝手に並べたりする新しい傾向[4,㉜⑱]に対して、「こうなると布目を拾って刺すには及ばない」[4,㉜]、「わざとヒシを除こうとして（中略）ヒシ刺しらしくないヒシ刺し」[4,㉜]などと否定的である。菱枠がない模様であっても小井川が評価したものは、連続する菱形相互の間隔が適当なもので、「その底にはまだヒシといった気持ちが力強く流れていた」[4,㉜]、「なんでもかでも“菱、をはずせば新しい美しさが生まれると考えずに、菱は菱でこんなふうにくずす手もあった。これだと菱刺しらしくそのまんま生きていた」[4,㉜-2]、「その菱形の間隔が菱刺しらしい感じを与えていた」[4,㉜-1]と評価している。伝統模様の崩れに対する批判は連載中繰り返され、模様の接続に関しても言及がある。

また、南部菱刺しでは模様を囲む菱枠を「アシガイ」と呼び、この菱枠がついたものを「型」または「型コ」と称する。この型を組み合わせ刺していく。第2回では、模様間の菱枠線の本数に

対し「二本でいいのを四本にしたため、ひどく感じが違ってしまった」[4,②]としている。現存する古作と呼ばれる作品資料を調査すると、菱枠には多様なデザインがあり、菱枠線四本のものも散見された。小井川が基準とする南部菱刺しの定義や「菱刺しらしさ」に関する明確な言及は記事中になく、その基準がどのような作品資料に基づいて形成されたのか、小井川の批判がどの作品資料(製作年代、地域、品目など)を基準になされているのか、記事内容のみでは特定できなかった。

(7) 人物

米内山義一郎、浜田喜四郎、二本柳校長、島守静翠居、新井田秀子、上杉修、盛田達三、夏堀謹二郎、工藤てつ子、妹背平三、山崎斌、山田よしの、川端康成、戸館第次郎の14名が登場する。人名表記は、「みちのくの造形 菱刺し編」本文に拠ったが、『青森県史文化財編 美術工芸』には、浜田喜四郎は「濱田喜四郎」[9,p.507]、工藤てつ子は「工藤てつ」[9,p.497]、戸館第次郎は「戸館第次郎」[9,p.498]と表記されている(筆者下線)。記述内容から小井川の南部菱刺し活動との関わりが濃厚と考えられる人物は米内山義一郎、夏堀謹二郎、工藤てつ子、山田よしの、戸館第次郎(登場順)である。小井川との関係性が明確に説明されず、どのような人物なのか記事単独では不明な点が多いため、『青森県史』など他の文献資料により補足調査し、次のようにまとめた。

1. 米内山義一郎：小井川と同時期の昭和7年(1932)、後述の戸館第次郎とともに南部菱刺し復興活動を行った上北町の人物である[9,p.498]。昭和初期には、青年団長として凶作地婦女子身売り防止運動に関わっている[12,pp.294-295]。「ヒシザシ(菱刺)の文様を八十ばかり刺さして持っている」[4,①]、「村の年寄りにヒシザシ(菱刺)の文様各種を刺さしたのがある」[4,②]と米内山が所有する作品資料を紹介しているため、南部菱刺しを介した交流があったことがうかがえる。小井川と米内山の交流を裏付ける他の文献資料はないか調査中である。
2. 浜田喜四郎：濱田庄司に師事した青森市の陶芸家で、こぎん刺し・南部菱刺し作品を収集していた[9,pp.507-508]。第10回で浜田所蔵の作品資料(ミハバマエダレ)を取り上げ、作品評価を行っている[4,⑩]。この作品資料や浜田喜四郎所有コレクションの所在は調査中である。昭和46年(1971)10月1日付の『東奥日報』に、「青森県の民芸」と題して浜田所蔵「菱刺し」(前垂れ)のカラー写真が掲載されている[57]。第10回掲載写真と比較したが別物であった。なお、民俗学者で青森県の刺子着研究に携わった田中忠三郎は、浅葱色の麻布に色毛糸で刺し綴った一枚の三幅前垂れを、浜田から譲られたことが、南部菱刺し模様調査の契機となったと述べている[54,p.133]。浜田の所蔵品の影響力の大きさを示している。
3. 二本柳校長：「小川原湖周辺の植物に詳しい」[4,⑭]と紹介されているが、他の文献資料に掲載はなく詳細不明である。
4. 島守静翠居：第22回でヒシザシの毬を詠んだ俳句の作者として登場するのみである[4,⑳]。八戸の現代俳句の先駆者として昭和7年(1932)から『奥南新報』俳壇の選者を務めており[12,pp.132-133]、小井川とも俳句を通じた交流があったのではないかと推測される。
5. 新井田秀子：小井川の息子が茶道を教わった五戸町の人で、安政三年製作の見本帳を刺したさる子の娘であると第22回に記載されている[4,㉑]ほかは不明である。
6. 上杉修：八戸郷土研究会の会員で、八戸藩の郷土史研究に携わった[9,p.538,p.544]。第23回掲載

の菱刺し見本帳の写真は上杉所有とあり[4,㉓]、南部菱刺し調査に何らかの形で協力していたものと推測される。

7. 盛田達三：林業家で青森県森林組合連合会会長を務めた[58,pp.165-166]ほか、七戸郵便局長も務めた[6,p.764]。「(米内山のと) いっしょにもう一通り刺したというのが七戸町の盛田達三さんのところにあった」[4,㉔]とあるので、南部菱刺し作品を所有していたと思われる。
8. 夏堀謹二郎：八戸郷土研究会の会員、「村の話」執筆者で、綾取り、折り紙研究を行った[5,p.543]。小井川が開催した菱刺し講習会の指導者として金子善兵衛とともに協力し、南部菱刺しの製作にも携わった[9,p.498]。第25回掲載の作品は夏堀が刺したもので「男で夏堀謹二郎君はよく刺した」[4,㉕]と記している。
9. 工藤てつ子：小学校教員で、小井川の勧めで南部菱刺しの研究、製作、技術継承に携わった[9,p.497]。「私の菱刺し織の知識は月館なか、工藤てつといふ二人の先生から得た」[34,p.35]など、小井川が復興活動について述べた他の文献資料にもたびたび登場する。
10. 妹背平三：堂本印象門下で京都出身の画家である。東北を旅した際に南部菱刺しを身につけた女性の絵を二枚描いている[9,pp.470-471]。一点は「八戸のめらし」で、連載最終回に掲載した絵である。もう一点の「東北の春」は東丘社展で次賞になり、昭和15年(1940)に『美術と趣味』に掲載され、美術と趣味社の高山辰三が評したと連載最終回で述べている[4,㉖]。
11. 山崎斌：植物染の伝統技法を復活させ「草木染め」と命名したことで知られる。昭和13年(1938)日本の衣・食・住の良さを見直すために「月明会」を結成し雑誌「月明」を発刊、昭和21年(1946)に長野県で「月明手工芸指導所」を設立した[59]。本連載では、妹背平三を紹介した「『月明』の山崎さん」として登場する[4,㉗]が、小井川との関わりの詳細は不明である。
12. 山田よしの：小井川の要請で、南部菱刺しを着用した写真撮影にモデルとして協力した、八戸市田面木出身の女性である。前述の妹背平三の絵のモデルである[9,p.471]。出身地、嫁ぎ先、没年など個人に関する最も詳細な記述があった人物で、小井川との親交の深さをうかがわせる。
13. 川端康成：第32回に小井川が鎌倉の自宅を訪問したことが記されている[4,㉘]ので何らかの関わりがあったと思われるが、他の文献資料に掲載はなく詳細不明である。
14. 戸館第次郎：小井川と同時期の昭和7年(1932)、上北町の米内山義一郎とともに南部菱刺し復興に関わり、製品開発、販売活動を展開した[9,p.498]。記事に「七戸の戸館第次郎さんが『たくみ』にテーブルセンターを送り出したのが、だいたいが私のまね、馬具を作る麻布であら目、できが悪かった」[4,㉙]とある。米内山と同様、小井川との交流を示す他の文献資料がないか調査中である。

(8) 作品資料

掲載写真以外の作品資料は8件と少ない。掲載写真としての作品資料は、絵画を掲載した最終回を除き、33件ある。製作者、所有者、品目、調査地、所在等が記述されておらず、作品情報が不明確なものが多い。しかし、これらの作品資料は、小井川がどのように南部菱刺しの調査を進めていたか、どのような作品資料を見て南部菱刺しを理解していたかを知るうえで、大変重要である。また、「(米内山義一郎の所蔵品の) 写真を土台に」[4,㉑]、「(盛田達三に所蔵品の) ネガをさがしても

らった」[4,⑭]などと記してあることから、小井川は作品現物のほか写真資料も使用していたのではないかと推測される。米内山が所有する作品資料の写真を送るよう依頼したが届かず[4,①]、現物は見えていない[4,⑭]と書いている点からも、写真資料の活用の度合いがうかがえる。本連載では、そのような写真資料をさらに撮影して新聞に掲載したのではないかとされる非常に不鮮明な画像が複数見られる。

(9) 文献資料

文献資料は 9 件、『奥南史苑』、『こぎん（コギン）刺模様集』、「縦と横と」、『民具問答集』、『工芸』、『弘前のこぎん』、『むつ』、「東北の旅」、『月明』（登場順）で、「東北の旅」のみ絵画資料である。うち、小井川自身が執筆した南部菱刺しに関する文献資料は、『奥南新報』掲載の「縦と横と」（表 2 の No.7）[46]、『民具問答集』掲載の「ヒシマエダレ（青森県）」（表 2 の No.9）[48,pp.4-15]、『工芸』（『工藝』）第 14 号掲載の「南部の『菱ざし』」（表 2 の No.2）[43,pp.51-57]、『むつ』（『郷土誌むつ』）第 2 集掲載の「南部の春」（表 2 の No.1）[42,pp.118-122]である。No.2.7.9 以外の文献資料について、記事単独では不明な点を『青森県史』などにより補足調査し、次のようにまとめた。

1. 『奥南史苑』[60]：青森県文化財保護協会八戸支部の機関誌である。昭和 31 年（1956）に創刊され、昭和 37 年（1962）第 6 号で休刊となる。小井川は「奥南の文化財」など 3 編投稿している。本連載では、「三差路」に関連して八戸高校生徒が投稿した『八戸地方の庚申塔分布と信仰』が紹介されている[4,⑬]。
2. 『こぎん（コギン）刺模様集』：国立国会図書館に所蔵がなく詳細は不明だが、本連載に青森県手工芸研究所篇と記されている[4,⑳]。青森県手工芸研究所は、民藝運動に共鳴し柳宗悦と交流があった相馬貞三が設立した。相馬は昭和 17 年（1942）に弘前に日本民藝協会支部を発足、昭和 24 年（1949）つがる工芸店を開店し、全国各地の民芸品販売と青森県産民芸品の製作・販売を行った。昭和 30 年（1955）生産と流通の連携を図る目的で設立されたのが青森県手工芸研究所で、つがる工芸店の販売物製作所の役割を担った [9,p.505]。本連載では、こぎん刺し模様のクツツナギやサカサコブの説明 [4,⑮]、刺し模様のグラフ化 [4,㉑]に関連して紹介される。
3. 『弘前のこぎん』：本連載には「弘前こぎん研究所の『弘前のこぎん』」とのみ記され[4,㉒]、発行元か所蔵元か詳細は不明である。弘前こぎん研究所は、昭和 17 年（1942）財団法人木村産業研究所が有限会社青森ホームスパンとなり、昭和 45 年（1970）有限会社弘前こぎん研究所に改称、現在までこぎん刺しの研究、製作、販売の母体となっている[9,p.496]。本連載では、こぎん刺し・南部菱刺しの発祥について述べた回で、『弘前のこぎん』に「弘前市付近の農村で百八十年ほど前に生まれかつ育った」と記載していることを紹介している[4,㉓]。
4. 『むつ』：昭和 6 年（1931）弘前市に結成された陸奥郷土会が発行した『郷土誌 むつ』[42]を指している。郷土研究に大きな役割を果たした雑誌である[61,p.512]。昭和 6 年（1931）3 月第 1 集が発行され、昭和 10 年（1935）5 月第 4 集で廃刊となる。執筆者には小井川はじめ、大川亮、森林助、中道等、中市謙三らが名を連ね、柳田國男も第 2 集に寄稿している。本連載では、こぎん刺しの発祥について述べた回で、こぎん刺し着物を着た人の絵が『むつ』の表紙になったことがあり、その着物は江戸時代製作のものらしいと記述している[4,㉔]。調査した結果、第 1 集～第 4

集の表紙にこぎん刺し着物を着た人の絵はなかった。第1集所収の大川亮「古錦(コギン)の話」に、「古錦を着けたる津軽の百姓姿」という写真が掲載されている[42,p.76]。こぎん刺し着物を着用した3人の女性を撮影したものであるが、掲載写真に関する説明が本文にはなく、小井川が本連載で取り上げたこぎん刺し着物に相当するのか、着用している着物が江戸時代に製作されたものなのかは不明である。同様の写真が『青森県史文化財編 美術工芸』[9,p.450]に引用されているが、これにも詳細な説明はなかった。

5. 「東北の旅」：妹背平三が東北を旅した際に南部菱刺しの女性を描いた絵画のうち一枚である[9,pp.470-471]。本連載では、昭和15年(1940)に『美術と趣味』に掲載され、美術と趣味社の高山辰三が評したと述べている[4,⑳]。
6. 『月明』：山崎斌が刊行した生活文化雑誌である[59]。昭和13年(1938)から昭和42年(1967)まで刊行した。本連載では、「東北の旅」を描いた妹背平三が「『月明』の山崎さん」の紹介で小井川のところに來たと記している[4,㉑]。

(10) その他(民俗・自然・文芸)

菱刺し以外の話題として、民俗・自然・文芸に関する記述が19件と多い。模様名称から連想した言及が最も多い。動植物に関して「(キジの足に因んで) トリアシショウマの花が終わった」[4,⑤]、「白銀須賀の三島川のほとりシギやチドリの足跡を見るのが好き」[4,⑥]など、地域の民俗に関して「(ベゴノクラに因んで) 櫛引は牛ひきから転化したという伝説があった」[4,⑩]、「小川原湖の北、平沼との間に七鞍平(ななぐらたい)があった」[4,⑩]などがある。話題があちこちに飛ぶので、南部菱刺し中心の読解を困難にする最大の要因になっているが、小井川の博識を示すとともに、どのような側面から南部菱刺しに関心を寄せているのかを考えるヒントとして検討に値する。

4.4 「みちのくの造形 菱刺し編」の研究資料としての問題点

「みちのくの造形 菱刺し編」を研究資料として見ると、非常に扱いにくい点がある。この連載は小井川自身の南部菱刺しに関わる活動の総括として記述されているが、思いついた順の随想形式で、あいまいな記述も多く、連載記事単独では小井川の活動状況を正確に把握しえない。たとえば、

1. 小井川はどのような背景や経緯から南部菱刺しの研究活動を手掛けるようになったのか。
2. 小井川が考える南部菱刺しの伝統とはどのようなもので、どのような経緯で形成されたのか。
3. 何度となく「菱刺しから手を引く」と記述されているが、いつ、どのような経緯でそのような心境に至ったのか。

などという多くの疑問点が残るのである。

分かりにくさの要因として挙げられるのは、①発生年次が前後して記述される、②よって出来事の因果関係がつかみにくい、③南部菱刺し以外の話題が混在し菱刺しとの関連が分かりにくい、④随想風の独特の文体が解釈しにくい、⑤説明や紹介が簡素過ぎる(よって原典調査が困難である)、⑥掲載作品のクレジットが明示されず作品情報が不明確である(よって原典調査や同定作業がほぼ不可能である)、⑦掲載写真が不鮮明である(連載当時の写真技術や複写による劣化等の物理的な原因のほか、写真を新聞掲載用に再撮影したためと推測される)、などである。

そこで、次章では、表 2、表 3 の小井川文献資料の内容と表 4「みちのくの造形 菱刺し編」の内容とを照合することで、小井川の南部菱刺し復興活動の推移や南部菱刺しに対する考え方の析出を試みる。「みちのくの造形 菱刺し編」には南部菱刺しの定義や発祥、模様造形など他にも検討すべき項目があるが、本稿では、小井川の南部菱刺し復興活動史に焦点を絞る。表 1 も踏まえ、日本国内および八戸地域の政治・経済・文化の動き、特に衣生活に係る出来事を抽出し、当時の地方の社会的背景や、津軽地方のこぎん刺しや民藝運動、民俗学の動向と照らし合わせて、小井川の活動との関連性を明らかにしたい。それらが小井川の南部菱刺し活動にはたして影響を及ぼしているのか、影響しているとすればどのように関連しあっているのかについて分析する。

5. 小井川潤次郎の南部菱刺し研究の歩み

5.1 南部菱刺しの活動年表

第 4 章表 4「みちのくの造形 菱刺し編」と第 3 章表 2、表 3 の文献資料の内容を照合・分析し、第 2 章表 1 の略年表も踏まえつつ、小井川の南部菱刺し活動史年表をまとめた(表 5)。小井川の活動に関して、表 2 の文献資料に相当する場合は表中の番号 No.1~16 を記載し、出典は表中に示した。小井川以外の南部菱刺し活動やこぎん刺しに関する活動について「青森県史デジタルアーカイブシステム」[10]等を参考に記載し、出典は表中に示した。八戸や日本の動向は主に「はちのへヒストリア」[31]から抽出した。

表 5 小井川潤次郎の南部菱刺し活動年表

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字(著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
安政3	1856		菱刺し最古の資料 (現在所在不明、記事のみ) 「新井田秀子先生のおかあさんが、十三歳で刺されたという三寸あまりに八寸のキレが三枚ある…『安政三年(紀元二五一六年)母さゝ子拾参歳之時刺之』と墨書がある」[4,②]	八戸藩内の紺屋鑑札一覽[53,p.12]			
明治5	1872			藍染めに用いた印度藍の輸入は明治元年より始まる [9,p.471]		富岡製糸場操業	八戸初の博覧会開催
明治11	1878			文部省学事巡視報告書「土民は半ば襦袢を衣となす…綿を入れることなく、布片を幾枚も重ねて、是を刺したる者なり」 [9,p.467]	『東北諸港報告書』に深浦港、鯉ヶ沢港、青森港への篠巻綿、切糸輸入の記録がある [9,p.465]	第1回内国勸業博覧会開催	養蚕・製糸業近代化のため八戸農舎創立
明治12	1879				六門屋主人『青森函館画談』にこぎん着物の風俗画収録 [9,p.461]		
明治13	1880						八戸町に養蚕伝習所開設
明治15	1883					大阪紡績会社(東洋紡)設立	
明治20	1887			ツツレ着物を着用した明治20年代の写真がある [53,pp.29-31]		北海道製麻株式会社設立、英国でアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会設立	

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
明治21	1888	0	小井川誕生	『青森県農事調査書』に上北郡、三戸郡の農家の生活困難状況記載、余業として麻布織が挙がる [9,p.469]	手織木綿が市場に出始める [9,p.466]		八戸大火
明治22	1889	1		風穴すゑ誕生 (手ほどの會菱刺し指導者) [62,p.89]、明治生まれの女性の談話を収録 [62,pp.76-91]		大日本帝国憲法公布、東海道線全通、柳田國男『遠野物語』刊行、柳宗悦誕生	八戸町誕生、三社大祭開始
明治23	1890	2		八戸町二十八日町にできた西村機業工場で綿木綿生産開始[53,p.9]		教育勅語発布、第1回衆議院議員総選挙	八戸地方初の郷土史『向鶴』刊行
明治24	1891	3			手織木綿が弘前市中の呉服店で販売、こぎん		鉄道東北線上野-青森間全通
明治27	1894	6	八戸尋常高等小学校入学	『八戸草』に八戸の呉服商一覧と2人の染物師名記載[53,pp.9-11]	刺しの最盛期は明治20年~25年と推定される [9,p.462,p.466]	日清戦争開始(~1895)	八戸支線開通
明治29	1896	8				日本毛織株式会社設立、渋沢敬三誕生	明治三陸地震・津波
明治34	1901	13	青森県立第二中学校入学	紺屋が各集落にあった。中野,市野沢(八戸市南郷区),扇田(五戸町),剣吉,斗賀,高橋(南部町)。藍玉一貫目の値は2円30-40銭~1円60-70銭 [9,p.471]	明治・大正期の子女は7、8歳になると糸と麻布を与えられてこぎん刺しを仕込まれた [9,p.490]	治安警察法公布、義和団事件、木製動力織機発明	八甲田雪中行軍遭難事件、『八戸商報』創刊
明治35	1902	14				人造藍の輸入が始まり国内産藍作りに影響[9,p.471]	
明治36	1903	15		金子善兵衛誕生 (手ほどの會菱刺し指導者) [58,p.214]		翌年日本初の百貨店三越開店	八戸俳諧倶楽部創立、八戸町初のガス灯
明治38	1905	17	民謡研究開始 [15,p.104]			日露戦争(1904~)	
明治40	1907	19	青森県師範学校本科第二部進学	水浅葱色に染めた布でマカナイを刺し、着物に仕上げるのに7日位、白浅葱色に染めた布でたっつけを刺すのは4日位かかった。刺し糸は細いジカナという木綿糸を使った。腰部分には粗い綿木綿が使われることが多く遠州木綿がほとんどだったという [9,p.472]	大川亮、こぎんの収集開始 [63,p.9]、相馬貞三誕生 [64][9,p.505]	新渡戸稲造「地方の研究」を柳田國男が聴講、東京勸業博覧会・第1回文展開催	
明治41	1908	20	長男、静夫誕生				『奥南新報』創刊、他県木綿流入増加で地元機業の再起促す記事掲載
明治42	1909	21	師範学校卒業、湊尋常高等小学校赴任			日本是世界最大の生糸輸出国へ	八戸・湊・鮫の郵便局間で電話回線開通
明治43	1910	22	腸チフス罹患 次男、靖夫誕生			柳田國男『遠野物語』刊行、郷土会創立、『白樺』創刊	千葉クラが八戸女塾創設、八戸水力電気株式会社設立
明治44	1911	23	南部菱刺し研究に着手 「手をつけ出したのは明治の末頃」 [50,p.7] 「明治の末近く小学校の先生になって湊を始めに、大館、館、下長苗代、ふんと飛んで野沢…と渡り巡っているうちに、着物やこれにツギをあてる形、ツツレの刺し方などに気を付けた」 [4,㉔]	八戸出身の久保提多が菱刺し前垂れを着けた「菊売り娘」を描いた [9,p.470]		日米通商航海条約改正調印、対外貿易拡大	電灯普及、工業振興
大正2	1913	25	自身の衣類などを手始めに製作 「大正の初めごろ、下長苗代で毛糸で刺してもらったのをひじ突きにしらえ、それを昭和7年~8年ごろすみ戸だなのふすまに張ったのがある」 [4,㉔]	南部地方で大正期まで麻作り麻織りが行われた。麻織は木綿と交換した [9,p.469]、大正初期のマカナイを着る娘の写真がある [65,p.52]		柳田國男『郷土研究』創刊、岡倉天心死去、第1回回案及応用作品展覧会(通称「農展」)開催	大凶作、東北振興会発足

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
大正3	1914	26		大正3年～4年頃に色毛糸が流入し多色の前垂		東洋紡績設立 第1次世界大戦	
大正4	1915	27	八戸郷土研究会創立[5,p.544]	れが発生、明治30年上北町生まれの姥の談話収録 [66,p.47]、菱刺しは明治末期～大正期が最盛期か [9,pp.501-502]	大川亮、農閑工芸研究所創設 [63,p.7]	大戦景気(～1918) 米沢人造絹糸製造所設立	
大正6	1917	29		南部町や田子町では大正初期頃、各家庭で蚕を飼い、その繭で真綿を作り使用していた [5,p.121]、大正期の八戸の呉服店一覧[53,p.11]			川村知事、青森県の振興をめざす「県治ノ三大要目」
大正7	1918	30				帝国人造絹糸(帝国)設立	日出セメント設立
大正8	1919	31		紺屋は大正時代中頃まで倉石村浦田、戸来村長峰、切田村各1軒、十和田相坂3軒、五戸2軒	大正9年(1920)弘前市商工案内の工業紹介に、弘前市では醸造業・機械業・木工業が盛んとある [67,p.567-570]	史蹟名勝天然記念物保存法施行、山本鼎ら「農民美術建業之趣意書」	鮫漁港修築起工
大正10	1921	33	「八幡馬の変遷ならびにその臆説」執筆	あったが、大正10年ごろ六戸村、十和田の紺屋がなくなる [9,p.472]		ワシントン会議、羽仁もと子自由学園創設、アチックミュージアムソサエティー誕生	
大正11	1922	34					蕪島ウミネコ繁殖地、蕪島が国の天然記念物指定
大正12	1923	35	小学校教員中心に技術習得・製作を開始 「ヒシザシは下長苗代を中心に手をつけた」 [4,②]、「女の先生に手をつけるように勧めた」 [4,③]、「まづこの前垂を…日計の山本ハナといふに刺してもらったのである。この婦人からはいまでも刺して貰っているが」「私の菱刺繡の知識は月館なか、工藤てつという二人の先生から得たのと今ある学校の隣の田中義一というが母な人から得ただけの事である」 [43,p.53]	藍の染賃は一尋(6尺、1.8メートル)単位で白浅葱は4銭、水浅葱は5銭(五戸町の菊池染物店の当主談) [9,p.472]		関東大震災 山本鼎、日本農民美術研究所設立	八戸裁縫講習所が千葉裁縫女塾に改称、新田川導水路工事竣工
大正13	1924	36	下長苗代小学校勤務および復興活動開始年について、資料No.2 [43,p.53]や『青森県史』 [9,p.497]には「大正12年」と記載されているが、資料No.13 [50,p.7]、資料No.15 [17,p.224]、資料No.16 [51,p.3]には「大正13年」と記載されている	大正時代の処女会の写真に写る娘たちのほとんどが縞の着物に緋のソデナシを着て縞や緋の前掛けをしている [53,p.33]		日本旅行文化協会設立、『旅』創刊	八戸大火 (小井川の自宅も焼失、転居)
大正14	1925	37		久保提多がつづれ刺し着物(マカナイ)を着た母親と乳飲子を描いた [9,p.471]	大川亮、全国副業展に農閑工芸研究所の作品を出品、入賞 [63,p.34] [9,p.471]	ラジオ放送開始、治安維持法公布、普通選挙法公布、『民族』創刊、柳宗悦「民藝」の語を造る[68,p.252]	小中野大火
大正15 昭和1	1926	38		大正末期に五戸町の写真館で撮ったという菱前垂を着けた娘の写真がある [65,p.65]		宮沢賢治「農民芸術論」	
昭和2	1927	39	柳田國男から葉書「誠に地方誌中の一異色に有之候」	『八戸草』に八戸にある6軒の染物屋が記載されているが、すでに着物地を染めることはなかったようである [53,p.10]	柳宗悦、こぎんに出会い弘前の長尾君子に収集を依頼、12月青森でこぎん着物を収集した [9,p.503,p.522]、相馬貞三、柳の「工藝の道」を読み民芸思想を知る [9,p.505]	金融恐慌、民俗芸術の会発足(柳田國男、今和次郎ほか)	第二次東北振興会再結成、青森県八戸商業学校設立

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
昭和3	1928	40	八戸郷土研究会結成[3][31]			東京上野公園で大 礼記念国産振興東 京博覧会開催、民 芸館出展[68,p.82] 仙台に商工省工芸 指導所新設、『民 族芸術』創刊	八戸銀行設立
昭和4	1929	41	『奥南新報』に民俗レポートや論考を發表、『奥南新報』に「村の話」連載開始		柳宗悦が入手したこぎんを(刺子錦 津軽地方)として『日本民藝品図録』に掲載、柳がこぎん刺しを全国的に紹介した最初 [9,p.522] 柳、こぎん着物を日本民芸品展覧会出品、村岡景夫にこぎん研究を勧める [9,p.503]、村岡と長尾君子結婚 [69,p.90]	世界恐慌、国立公園協会発足、国宝保存法制定、『民俗学』発刊	八戸町・小中野町・湊町・鮫村が合併し八戸市誕生
昭和5	1930	42			村岡、西こぎん収集と調査を行う、東こぎん調査は大川亮の助けを借りる [9,p.504]	昭和恐慌、今和次郎・吉田健吉『モデルノロヂオ(考現学)』	八戸港、内務省指定港湾となる
昭和6	1931	43	教育における「手の修練」「手の工芸」重視 小学校の手工教育が表面的になっていることを危惧し「手の修練」の必要性を感じ、6月東京のデザイナー杉山寿栄男を招き、八戸高等女学校で「手の工芸」と題する講演会を開催 [9,p.497]、「『手の工芸』といふ話は、私のところでもして貰った」[44]、「此新聞(奥南新報)には昭和16年廃刊まであれこれとヒシザシのことを書いていた。ヒシザシのカットは杉山寿栄男が土地のいろいろと共に描いた」[50,p.7] *杉山寿栄男：図案家、考古学・民俗学研究、生前数万点のアイヌ民族関係資料を収集(東北歴史博物館) 「『工芸』十一に「津軽と南部の窯」(村岡景夫)が載ったのは昭和六年九月、…久慈焼の最初の文献であろう」[17,p.229] 11月『郷土誌むつ』第2集に「南部の春」掲載資料No.1 「『ふしざし』(菱刺繡)や『ひすまいだれ』(菱前垂)のことを書かうと思つてみたが、此間中すこしばかり忙はし過ぎた。そちこち駆けずつてみて寫真も今日になつては撮れさうも無いので後廻はしとする…」[42,p.120]	高橋一智が河井寛次郎を訪問した際に柳宗悦に菱刺しを持参したことと柳は南部地方に菱刺しが存在すること、 八戸の小井川潤次郎が菱刺しに詳しい ことを知る [9,p.503]、染色家の芹沢銚介が青森、弘前、八戸を旅し八戸市では小井川を訪ね小絵馬を入手、菱前垂を入手できなかったのを残念がる [9,p.507]	村岡景夫、秋から弘前でのこぎん調査開始 [9,p.503]、大川亮は当時「工芸の大川」として全国的に知られていた [69,p.88]、弘前市で陸奥郷土会結成、『郷土誌むつ』刊行[61,p.512]	満州事変、『工芸』創刊、『郷土研究』復刊	冷害による大凶作、深刻な被害、第二次東北振興会活動本格化、八戸小唄制作
昭和7	1932	44	大川亮との交流 大川亮を訪問し、自分は地元の菱刺し復興の役割を担う決心をした [9,p.497] 2月『工芸』14号で南部菱刺し紹介資料No.2 「ヒシザシが文字になって世間に出たこれが最初かもしれない」[4,28] *柳宗悦が巻頭言と図版解説、村岡景夫がこぎん刺し解説を執筆している[43]。小井川が菱刺し、村岡がこぎん刺しという研究分担ができおり柳の依頼に従って執筆したと思われる[69,p.91] 2月『奥南新報』で工芸展覧会の開催発表資料No.3,4 「私たちが手を下し得る凶作、不況対策の第一のものと考えた」「やらうとする事は物を見る會であつた。見てから考へて貰ひたい為めのそれで…」[44] 市中で菱前垂着用の人を見る 「菱前垂をあてた女はまだ三日に一人、五日に二人といった位は道で遭つた。…近頃になって筆筭の底などから引出されて来ることが多くなったようにも見受けられるが、新しく刺す者はあまり無い」[43,p.56]	柳宗悦は『工芸』14号で菱刺しを「地方的な日本刺繡として、之程多彩な美しい品を私は見た事がない。知らなければ、スカンティナピアあたりのものと思ふであらう」と評した [43,p.8]。さらに「此一枚は薄色の藍染の麻布に、白と紺との木綿糸で刺し、之に赤と褐との毛糸でさらに模様を加へてある。毛糸入のもの故恐らく明治になつてからのものと思へる」と解説 [43,pp.8-9]。	柳宗悦は『工芸』14号で、こぎん刺しは他の地方には生まれぬ津軽地方特有のものとして、その伝統はすでに絶えて甦る望みは薄い、今の女達は「こぎん」を作る事情を持たないから「こぎん」を作り得ないと記した [43,p.3]。「今の人々は自由に急ぐ、それ故『こぎん』が出来ない不自由さを嘗める。醜さの大かたは法を等閑りにするからである」と記す [43,p.43]。	血盟団事件、満州国建国、民俗美術工芸展覧会開催、自由学園に工芸研究所創立	八戸市営バス創業、八戸観光協会設立、是川遺跡に記念碑

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き	
昭和7	1932	44	<p>6月国画会展覧会に出品 柳宗悦の仲介で菱刺しが東京の国画会展覧会出品、展覧会は6月18日～22日に三越で開催、7点の菱刺しが出品され好評を博した [9,p.497,p.504]</p> <p>柳宗悦から小井川宛書簡：5/27国展出品、6/30素地の色指定、9/28価格確認、10/27国展菱刺し会計 [40,p.483,p.487,p.504,p.506]</p> <p>7月17日.24日八戸郷土研究会「菱刺しほどきの會」開催、7月13日.22日『奥南新報』に案内 資料No.5,6 「その頃下長苗代や館村から女の人を頼んでは屢々手ほどきの会をひらきひらきした」 [50,p.7]、「復原しようとして刺し方の講習会みたいなものを幾度も開いた」 [4,㉔]、「國展へ出した手提や銭入やテーブルセンターも戻っております。工藝展覧会の時の作品もあります」 [45]</p> <p>9月24日、26日長苗代小学校で菱刺し講習会開催、9月22日『奥南新報』に案内 三戸郡教育会主催で実施、菱刺しの実習と講演を行う [9,p.497]</p> <p>9月30日湊小学校での菱刺し講習会開催、9月25日『奥南新報』に案内 八戸市教育会主催で実施、30日菱刺し、10月1日木工の講習会開催、「八戸教育委員会を動かし『菱刺し講習会』が小学校に広がる」 [9,p.497]→昭和9年の項参照</p> <p>10月19日『奥南新報』に「縦と横と-菱刺繻小考-」掲載 資料No.7 南部菱刺しとこぎん刺しの起源、模様発生に関する考察 [46]、同面に柳田國男「盆過ぎメドチ談」掲載、菱刺しカット図案は杉山寿栄男によるもの→昭和6年の項参照</p> <p>東京向け新製品開発・製作 柳宗悦が菱刺しの技法を応用した新作を送るよう指示、柳は書簡の中で「創作というより在来のやり方を活かす方がよい」など模様やデザインに細かい注文をつけている [9,p.504]、「ざぶとんも花びん敷きも手文庫にも掛け鏡台にもブックカバーにも手さげにも作った。『たくみ』という銀座の民芸店へはさいふやがまぐち、それに卓布を刺してやった。女帯の注文がき、三、五本刺してやった」 [4,㉔]</p> <p>復興活動の拡大 「上北町の米内山義一郎さんがヒンザン（菱刺）の文様を八十ばかり刺さして持っている」 [4,㉑㉒] 「七戸の戸館第次郎さんが『たくみ』にテーブルセンターを送り出したのが、だいたいが私のまね、馬具を作る麻布であら目、できが悪かった」 [4,㉓]</p> <p>麻布の質低下 「麻布はそのころから無くなる一方、九戸でアイ布も見つからなくなった」、「その頃既に麻布が少なくなっていたし目の荒い物だけで菱が菱にならず四角になった。わたしはそれなり手をひいてしまっていた」 [4,㉔]</p> <p>『工藝』17号が絵馬（藤右衛門の小絵馬）の特集</p>	<p>木村隆三、財団法人木村産業研究所設立、実際の運営には藤田一誠、大川亮、横島直道、高橋一智があたった。木村産業研究所は後に有限会社青森ホームスパン、さらに有限会社弘前こぎん研究所に引き継がれる [9,pp.495-496]</p>				

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
昭和8	1933	45	<p>1月21日頒布会開催、1月13日、19日『奥南新報』に案内資料No.8 自宅で久慈焼中心の頒布会を行う[47]</p> <p>柳宗悦から小井川宛書簡：2/8高島屋での総合工芸展覧会への菱刺し出品依頼、3/3納入依頼と記載[40,p.526,p.532]</p> <p>地の麻布と藍染について 「麻は自家では餘り作らず、買った方が多く(川内、上市川は自家製、館村はもと多少自製)、そのどっちにしても村にある或いは町の染屋で染めさせました」[48,p.8]</p>	<p>「今でこそ紺屋のある村は珍しいが、昔(明治34年～35年頃)ほどの村でも一軒二軒の紺屋はあった(村の話)」1月19日付『奥南新報』[9,p.471]</p> <p>民俗研究者・収集家の田中忠三郎誕生[9,p.498]</p>	<p>相馬貞三、竹館村農芸会に從事しつつ民芸活動[64]、工藤得子、こぎん資料収集と聞き取り調査開始、古作こぎんの文様を方眼紙に書いて刺し方分析を行う[9,p.499]、12月に銀座西八丁目「たくみ工芸店」開店[69,p.96]</p>	<p>農林省外郭団体として山形県に積雪地方農村経済調査所設立、農閑期の副業としての産業化を目指し柳宗悦に東北地方の手工芸調査を依頼[68,p.156]、ブルーノ・タウト来日、第1回商工省輸出品展覧会開催</p>	<p>三陸地震による津波被害</p>
昭和9	1934	46	<p>菱刺前垂の女の人を見かける (質問者)「本年の二月十日に、菱刺の前垂をあてた女の人を、今年になってただ一人見かけられたそうだが(奥南新報 昭和9年2月14日)」[48,p.6]</p> <p>7月19日『民具問答集』の回答期 「大分すたれたので二、三年此方私らで講習を開いたりして生きのこっている村の年寄から教えてもらい、今では小学校の手芸などに一つ二つの学校がとりいれています」[48,p.8]、「(製作者の)山本ハナ、44歳か5歳と思います」「(作る人は)至って稀になりました。30歳で館村でさしているのが一番若い人で、40代以上の方がさします。30年ちかく前からすたれ出し20年位で綺麗にあとがなくなりましたよ」[48,p.6]</p>	<p>柳宗悦『美と工芸』(建設社発行)で初めて菱刺し写真掲載[9,p.523]</p>	<p>今純三、『青森県画譜』第5輯「郷土工芸図」に三編こぎんを描き「賣るために刺すのではなく着るために或は又着せる為に刺すのであった」と解説している[9,p.461]</p>	<p>日本民藝協会創立、日本民俗協会発足、日本民族学会設立、第1回日本工芸品展覧会開催、第1回産業工芸博覧会開催、最初の国立公園指定</p>	<p>凶作、出稼ぎ増加、東北振興会の陳情を受けて内閣は東北振興調査会設置、羽仁もと子創立の婦人友友の会が「東北農村生活合理化運動」第1期開始、東北6県にセトルメント設置、青森県は東津軽郡小湊町に設置[68,p.257]</p>
昭和10	1935	47	<p>柳宗悦から小井川宛書簡：3/19好物恵贈御礼[40,p.53]</p> <p>作品の受賞 第8回青年創作副業品展覧会では自作のテーブルセンターと花瓶敷きが入選し、宮内賞皇后宮職御内儀御買上となった[15,p.104]</p> <p>柳田國男の還暦記念の日本民俗学講習会参加、「民間伝承の会」(後の日本民俗学会)創立に参加、小井川潤次郎は青森県代表の世話人に選出</p>	<p>明治35年生まれの人が大正10年に嫁し27歳位になる昭和4年まで菱刺しを刺し、刺した前掛けは昭和10年頃まで祭りの時に締めた[9,p.468]</p> <p>大正14年生まれの大長が娘になったとき菱前垂れを「古臭いから嫌だ」と言って締めた[62,p.77]</p> <p>昭和10年代より女性性はモンペを用いる[53,p.1]</p>	<p>柳宗悦、高橋一智の案内で木村産業研究所訪問、こぎん刺し復興を指示[9,pp.503-504]、湯浅八郎は柳の民藝運動に啓発され民芸品を収集、のちに国際基督教大学湯浅八郎記念館設立へ[9,p.507]</p> <p>濱田喜四郎が南部小絵馬・こぎん刺し・菱刺しの収集開始[9,p.508]</p>	<p>日本民俗協会機関誌『日本民俗』刊行、日本民族学会『民族学研究』創刊、『アチック・マンスリー』第1号発刊</p> <p>米国でナイロン開発</p>	<p>神田柳浦(神田重雄八戸市長)「東北振興と八戸港の使命」</p>
昭和10年代			<p>古作調査、古作収集家との交流 「浜田喜四郎君所蔵のミハバマエ、『ベゴノクラ』と『ハナノモンコ』の『九つひし』をまじえたきれいなもの」[4,⑩]</p>				
昭和11	1936	48	<p>2月10日菱前垂の女を見かける 白山堤で見た菱前垂の女は下館りよ、田面木の人で手ほどきをしてもらったうちの一人、菱前垂は去年拵えたもので「白と浅黄のだんだらで遠くから綺麗に見えた」[49]</p> <p>3月19日最後の菱前垂の女と出会う 「昭和十一年三月十九日根城の東善寺の前で雲雀を聞き、其の朝菱前垂の女に逢って、初雲雀菱前垂の女かなと『わたくしの手帖』に書いていた。…このあと手ほどきして貰った女の一人が前垂をあてて三軒屋で逢った位で路上でも街の中でも目につかなくなった」[50,p.7]</p>		<p>大川亮、農閑工芸研究所出品したケラを応用した作品が入賞と皇后宮職御買上となる[63,p.35]</p>	<p>二・二六事件、国画展に棟方志功「大和し美し」出品、日本民藝館設立、人造絹糸が世界の生産、全日本産業美術連盟設立、日本工作文化連盟結成</p>	
昭和12	1937	49	<p>柳宗悦から小井川宛書簡：1/1好物恵贈御礼、6/6民藝館で22日からこぎん菱刺しの大きな会開催、菱刺し分布図作成依頼[41,p.112,p.121]</p> <p>『民具問答集』で南部菱刺し紹介、刺し方表・グラフ発表 資料No.9 「アチックミュージアムの『民具問答集』という本には、その表とグラフを図にして載せた」「『コギン刺模様集』(青森手工芸研究所編)あんなグラフ模様が用いられた最初のように思っている」[4,⑩]</p>	<p>『八戸商工案内』昭和12年版に八戸の特産品として八幡馬、えんぶり人形、八戸煎餅、菊羊羹、むし菊、うに缶詰、いか徳利が挙がるが南部菱刺しは含まれていない[70,p.16-21]</p>	<p>日本民藝館で6月22日～8月25日特別展覧として「刺し子類こぎん・其の他」開催、こぎん刺しや菱刺しを中心に約200余点を展示[9,p.523]</p>	<p>盧溝橋事件(日中戦争開始)、南京事件、日本民族学会附属民族学研究所会開設、『アチック・ミュージアムノート第一民具問答集 第一輯』刊行</p>	<p>種差海岸が国の名勝指定</p>

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
昭和14	1939	51	田面木の娘 (山田よしの) の着用写真撮影 「前だれ、手甲、大きなかすり(紺)のジupan(襦袢) ツツレのソデナシを着た」「この着物などもそっくりフランスへ嫁入りしてしまった」[4,①]、「このメラシは田面木の 山田よしの 」「嫁入り先が下風呂…『よしのが子宮がんで死んだって、かわいそうに』といわれた。私のヒシザシもここで終わり」とある[4,②]、「フランスの博物館へやるのに田面木の 山田よしの に著せて撮した写真を年賀写真に使った。これが縁で堂本印象門下の妹背平三が来て画にした」[50,p.7] *メラシとは南部地方の方言で若い娘の意 「戦争中東京へ行ったり来たり、コギンとヒシザシで防空ずきん、綿を入れてかぶった。鎌倉で川端康成さんをたずねていると外から帰って玄関からつまみあげてき『これはもったいないですな』とあった」[4,③]	八戸の菱刺しはフランス国立トロカデロ人類博物館での日本生活文化展に展示され、日仏親善に寄与するまでになった [15,p.104]	日本民藝館で5月9日～6月11日東北の民藝展開催[68,p.256]	第二次世界大戦 (~1945)、米穀配給制度公布、日本民族学会附属民族学博物館開館、若い女性対象に「東北農村女子生活講習所」開設 [68,p.256]	日東化学工業八戸工場が操業開始 貿易港として開港指定
昭和15	1940	52	6月『美術と趣味』に南部菱刺し姿の絵画が掲載 「六月の『美術と趣味』の特集に堂本印象一門の東丘社展で東丘次賞になった『東北の春』は、ヒシザシが画になった最初かも知れない」「紀行文『東北の旅』…にはスキを手にしたメラシのスケッチがついている。この稿の最初に載せた前だれをあてた女である」「(『東北の春』)画面にはこのメラシが馬を押えている。ヒシザシの前だれをあてている。向こうに草に横になっている同じようにふろしきをかぶったメラシその向こうに馬が二、三頭遊んでいる」[4,④] *モデルは山田よしの		高橋寛子、大川亮の世話で木村産業研究所に入りこぎん刺しを始める [9,p.500]、昭和15～20年には高橋一智が小杉(寛子)の指導を行ったという(高橋寛子談)、高橋は方眼紙でこぎん刺し文様を製図した [9,p.496]	民藝運動の東北支援プロジェクトの成果として日本橋三越で6月23日～29日に東北民芸品展覧会開催 [68,p.156] 柳田國男・柳宗悦ら座談会「民芸と民俗学の問題」 [68,p.258]	八戸商工会議所設立、三戸郡館村の売市、沢里、根城、田面木、沼館が八戸市に編入
昭和16	1941	53		タツツケにかわりモンベが流行る [5,p.103]、十和田市深持付近ではこの頃まで田植前に畑にイト(麻)の種子をまき、お盆前に麻の取り入れをした [5,p.119]		太平洋戦争(~1945)、物資統制令交付、東洋レーヨン(東レ)ナイロン合成に成功	根城址が国の史跡に指定
昭和17	1942	54			木村産業研究所は有限会社青森ホームスパンとなる [9,p.496]、日本民芸協会青森支部発足 [64]	アチックミュージアムを日本常民文化研究所と改称	下長苗代村を八戸市に合併
昭和18	1943	55	田面木尋常小学校校長退職、新井田城跡史跡指定のための活動	本山桂山著『日本民俗図誌』に菱刺し、こぎん刺しの図柄が掲載 [52,pp.186-202]	村岡景夫『津軽のこぎん』刊行 [9,p.505][71]、相馬貞三「東北生活文化の真価値」掲載 [8,pp.728-731]	ガダルカナル島撤退、学徒出陣、工芸の統制機関の大日本工芸会創立、文部省直轄の民族研究所設立	能田多代子(五戸町出身の民俗学者)『村の女性』刊行
昭和19	1944	56	柳田國男の古稀記念文集のために「オシラサマの鈴の音」を執筆・脱稿			サイパン陥落 東条英機内閣退陣	学徒勤労動員
昭和20	1945	57				ボツダム宣言受諾(終戦)、日本繊維協会発足、渋沢敬三が日本民族学協会会長就任	八戸空襲、「稲木」鮫沖合で沈没、『デーリー東北』創刊
昭和21	1946	58	八戸郷土研究会機関誌『いたどり』創刊、『八戸郷土叢書』刊行、『民俗展望』創刊、これらに自身の論考を次々とまとめる			日本国憲法公布、第二次農地改革、繊維品の生産再開	八戸商工会議所再設立、杉本行雄が渋沢農場解体のため青森県赴任

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
昭和22	1947	59	八戸郷土叢書別輯 民俗展望：吊ひどめの塔婆、柿の葉人形など刊行 八戸総合芸術展（春光会展）第一回展に小井川潤次郎も出品、春光会展覧会は毎年春秋、八戸商工会議所で開催、昭和28年まで続く[72,p.67]			労働基準法、冷戦顕在化、独占禁止法、民俗学研究所設立、ファッション雑誌出版、新衣料品配給規制施行	
昭和23	1948	60	八戸郷土叢書：虎を描く、褌子の話、虎杖園詠艸など刊行	6月柳宗悦『手仕事の日本』刊行、青森の項(pp.111-120)でこぎん刺しと菱刺しを芹沢銈介の挿絵とともに紹介[9,p.502]		大麻取締法制定、第1次ベビーブーム、洋裁やスタイルブック全盛、日本紡績協会・日本化学繊維協会創立	村次郎「あのなっす・そさえて」
昭和24	1949	61	八戸郷土叢書別輯 民俗展望：内耳の鍋刊行	五戸町の菊池紺屋では昭和24、25年まで麻布を染めていた[9,p.472]、田中忠三郎「津軽南部のさしこ着物」(国重文)の収集を開始(～1981)[9,p.498][65]	相馬貞三、弘前に「つがる工芸店」を開店[9,p.505][64]	民間伝承の会を日本民俗学会と改称、ナイロンフィラメント糸生産開始、全国で小売店主催の競り市や交換会が盛んになる	北奥羽経済建設協議会創立総会
昭和25	1950	62	『八戸郷土研究会月報』発行、八戸郷土叢書：おしらさま勸請記刊行 作品資料の共有 「昭和25年だったと思う秋の共進会に南部文化史館というのを私らがやったことがある。そのときのネガをさがしてもらったのが盛田さんにあったそれ(菱刺しの見本帳)」[4,24]			朝鮮戦争(～1953)文化財保護法公布	朝鮮特需、安藤昌益研究活発に、上水道給水開始
昭和26	1951	63	『柳田國男先生古稀記念文集 日本民俗学のために』に「オシラサマの鈴の音」収録、冊子類『小中野風土記』、八戸郷土叢書：十王院拾遺など刊行			サンフランシスコ平和条約、日米安保締結、衣料自由販売(切符制廃止)、『工藝』終刊	八戸港重要港湾に指定、杉本行雄が十和田開発設立
昭和27	1952	64	日本民俗学会名誉会員、八戸郷土叢書：しまもりの話など刊行			サンフランシスコ平和条約発効	八戸市教育委員会発足
昭和28	1953	65	八戸郷土叢書：いたこの伝承刊行		相馬貞三、つがる工芸店で販売するこぎん刺し製作のためこぎん振興会結成[9,p.505]、メンバーの櫛引忠三はこぎん収集家として有名、振興会主催の講習会が4回開催される[69,p.97]	NHK日本初テレビ放送開始、通産省が合繊産業育成五ヵ年計画決定、日本民俗学会『日本民俗学』創刊、折口信夫死去、第1回生活工芸展開催	杉本行雄が十和田湖畔に十和田科学博物館建設し観光事業に着手
昭和29	1954	66	八戸郷土叢書：奇峯学秀刊行		弘前工業研究所の染織部休止	ピキニ環礁水爆実験	是川村を八戸市に合併
昭和30	1955	67	第8回東奥賞（東奥日报社）		相馬貞三、つがる工芸店の販売物製作所の役割を担う青森県手工芸研究所を設立[9,p.505]	高度経済成長期(～1973)、アクリル繊維の生産開始	上長苗代・市川・館・豊崎村が八戸に合併
昭和31	1956	68	八戸郷土叢書：鶏舞・駒踊刊行			日ソ共同宣言、国際連盟加盟、日本綿産業振興会設立 ミシン普及率が都市で75%	『北方春秋』創刊、光星学院高等学校、八戸高等電波学校設立、都市ガス供給
昭和32	1957	69	是川遺跡の史跡指定に研究貢献			アクリル繊維の生産開始、民俗学研究所解散、柳宗悦文化功労者顕彰	是川遺跡が国の史跡指定 三八城公園開園

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
昭和33	1958	70	『講座日本風俗史 第3巻』に「青森風土記」収録 「ヌノツツレ・コギン・ヒシザシ」資料No.10 「ヌノツツレというのは麻布を粗く刺したので、浅黄の地に村々で肩や袖に色の変った白浅黄や水浅黄の帛を配して縫いつけられていた。その文様から街の人たちは村々の人たちを識別した。昭和の半頃まで木綿が普断に用いられてから久しくなってもこれが続いていた。麻布への刺繍が綿糸になってからは急速に発達した」「コギンもヒシザシも嫁入支度の中に加えられていたが、やがて緋(飛白)がはいて来てこれに押しひしがれて殆ど姿を失っていた」[22,p.30]	デーリー東北記事「南部ひしざしに保存策を」に「さる三十三年、商工会議所が主催してこの振興をはかる目的で『ひしざし講習会』を開き… <u>風穴スエ</u> さんを講師に招き、四十人の受講性が集まって第一回の講習会を開いた」と記載 (昭和43年10月30日掲載)	相馬貞三、第12回日本民藝協会全国大会を青森で開催[64]、陶芸家濱田庄司が柳宗悦に「この大会は、それまでの大会中の白眉であった」と伝えた[69,p.97]	岩戸景気(~1961) 三池炭鉱争議、東京タワー完成、東レ・帝人がテトロンの名でポリエステル繊維生産開始	八戸文化協会発足、八戸芸術鑑賞協会(芸協)結成、八戸社会経済史研究会設立
昭和34	1959	71	『大館村誌』刊行			皇太子ご成婚	『北方文学』創刊
昭和35	1960	72		デーリー東北記事「南部ひしざしに保存策を」に「三十五年、第一回の受講生だった民芸ののや店主伊藤二子さんを講師にして第二回の講習会を持ったわけで、現在、手がけている人たちはこの時の講習生」と記載 (昭和43年10月30日掲載)	前田セツ「こぎんむらさき会」設立、後進指導や展覧会開催など積極的に普及活動を行った [9,p.500]	日米安全保障条約調印、安保闘争、「国民所得倍増計画」、カラーテレビ放送、化学繊維工業が急速に回復し1960年頃の生産高は世界第二位、財団法人東レ科学振興会設立	特定第3種漁港に指定、チリ地震津波
昭和36	1961	73	古作調査、フィールドワーク、交流 「小川原湖博物館の『さしこ着』は美しかった…土地の人らしい二、三人が『さしこ着があるとタツツケがないばならないやな』と話合っていたが、私が見た娘たちはみんな白い長そでじゅばんにタツツケをはいていた」[4,⑩]、「小川原湖博物館に平沼から移した民家があった。そのヒビド(いろり)ばたで米内山さんにあった」[4,⑪]、「どれもこれも『くずしもの』」[4,⑫]、「上杉修君の写真だが、刺した人も持ち主も分からない」[4,⑬](上杉修：八戸郷土研究会員、地方史研究)*作品資料は現物のほか、写真で多数、共有保存していたらしいことが資料No.12の記述から推測される。 単著『八戸の四季』刊行	渋沢敬三と杉本行雄、中道等が民具を収集して旧小川原湖民俗博物館開館 (2009年閉館) [9,p.499]		ベトナム戦争(~1973)、農業基本法、貿易自由化実施、綿製品の高級化目立つ、柳宗悦死去、通産省にグッド・デザイン審査会設置	三浦哲郎『忍ぶ川』第44回芥川賞受賞、第2臨海工業地帯の建設計画策定、白銀大火、青函トンネル着工
昭和37	1962	74	6月20日『東奥日報』「布目を追うてーヒシザシ雑記」掲載 資料No.11 「私はもともと滅びかけたヒシザシを残すことに努めた。…ひしというものから離れかねた。(最近の人は)すぐひしをはずして中の文様だけを刺したがった。時代や年齢がこうするのだが、私とすると意味がないことになった。いきおい手を引いてしまったことになる」[49] 6月27日から『東奥日報』「みちのくの造形 菱刺し編」連載 資料No.12 「昭和三十七年六月から『東奥日報』の『みちのくの造形』に写真とともにちよびちよびしたヒシザシの短章を三十三回書いた。こんなのがわたしのヒシザシの文献かもしれない」[50,p.7] 昭和7年『工藝』14号に掲載された口絵7の着物は「布目を追うてーヒシザシ雑記」の中で「七戸で目にしたものが今は民藝館にある」と書いたものに相当 [9,p.522]	新聞記事「光りを浴びた民芸品 意義あった『ヒシザシ』講習会」 八戸市、市物産協会、市商工会議所、市物産陳列所の四者共催で73名の受講申込者が数日間、 <u>風穴すゑ</u> さん(70才)の指導を受けた。市物産協会ではヒシザシ研究会(仮称)を作って3月14日に商工会議所で会合。2~3か月の間に講習会用のテキストを作り研究会員に配布するなど市物産協会の仕事として推進する(新聞社、年月日不明)	青森県民藝協会が機関紙『みちのく民藝』発行。編集、発行の責任者は相馬貞三でこぎん刺しや菱刺しがたびたびとりあげられる。相馬貞三、高橋一智、 小井川潤次郎 が執筆として名を連ねた [9,p.506]	柳田國男死去、デザイン振興協議会発足	

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
昭和38	1963	75	<p>3月31日まで『東奥日報』「みちのくの造形 菱刺し編」連載 資料No.12 「私のヒシザシもここで終わり」とある [4,㉔]</p> <p>菱刺し文献資料の少なさ 「ヒシザシについて書かれたもの一文献といったものは私の目にはまだ触れていない」 [4,㉔]</p> <p>活動の成果、ふりかえり 「土地の人たちは新しい方向へ向いていってしまい、この手ほどきをした人たちが多少これを身につけていた」 [4,㉔]、「私は、生まれ土地にしがみつくと癖がぬけない。麻布が無くなって手持ちのをすこし刺させたきり手を引いてしまった。手を引いてから久しくなつてから書くそれぞれだった」 [4,㉔]</p>	高橋一智「みちのくの造形・刺しこぎん編」には南部菱刺しに関する記述もある。「ひし刺しは補強を用途上の主要な目標にえらび」 [73,㉑]、「タツツケには(中略)ひし刺しと、その発展経路のごとくが含まれている」 [73,㉑]、「模様制限を受ける偶数率」 [73,㉑] などである。	高橋一智は昭和38年7月14日～翌39年5月31日まで42回にわたり『東奥日報』に「みちのくの造形・刺しこぎん編」を連載 [73] [9,p.496]	沢沢敬三死去	
昭和39	1964	76	<p>『北方春秋』15号に自伝を寄稿 [29,pp.70-84]</p> <p>3月『八戸の民芸』刊行、「八戸の民芸」資料 No.14、「ひしざし—菱刺繻」資料No.13,15 「津軽のコギンがしきりと叫ばれ出してから、南部でもヒシザシに手をつける人が多くなって来、ヒシザシを身につけた紳士淑女を店頭、街上でよく見かけた。が、それはわたしの言うヒシザシとは多少異なっていた」 [50,p.7]</p>	西野こよ「刺しっ娘の会」設立、指導を行う。西野は風穴すゑと工藤てつに菱刺しを習う。西野は、小井川潤次郎の「形を崩してはいけない」との教えを心の支えにしている [9,p.501]		東京オリンピック開催、オリンピック景気、東海道新幹線開通	新産業都市指定、多賀台団地造成開始
昭和40	1965	77	『八戸覚え書』刊行			日韓基本条約	八戸港が木材輸入特定港に指定
昭和41	1966	78	<p>第8回青森県文化賞受賞(民俗学) 青森県文化財専門委員、八戸市史編さん委員・監修者、根城史跡保存会長などを務めた</p> <p>10月菱刺古作展開催 (第六回民芸古作展) [74,p.5]</p>			いざなぎ景気(~1970)、日本総人口が1億人突破、国立劇場開館	八戸市環境衛生課に公害係新設
昭和42	1967	79	<p>1月『みちのく民芸』第12号刊行、「ひしざし—菱刺繻」掲載 資料No.16、相馬貞三が「菱刺のこ—その展覧に寄せて—」および菱刺し図版解説を執筆 「八戸の小井川潤次郎、七戸の戸館第次郎、米内山義一郎氏らがその制作につとめ、一時、東京方面にも製品を出したが、事情あってその後ふるわなくなった。製品を出して市販までこぎつけたのは菱刺がさきであって、こぎん刺は戦後にまでその面での動きは活発ではない」 「昭和37年6月に始まった小井川潤次郎氏の菱刺繻の執筆は38年にまたがり、大いに菱刺の真価を謳われたが、なおすぐれた古作の実物に接する機にはめぐまれず、人々は隔靴の嘆を持ちつづけた。…今やそのよき機会に恵まれるに至ったのである (前年開催の菱刺古作展を指す)」 [74,p.4]</p> <p>音喜多富寿が第9回青森県文化賞受賞(民俗学)</p>			公害対策基本法	三菱製紙八戸工場竣工、馬淵川が一級河川に指定
昭和43	1968	80	「文化財の調査・指定保護に尽くした」として勲五等瑞宝章を受章、八戸郷土研究会が12年ぶり『八戸郷土叢書』を1点刊行したが、ほかに目立った活動なし	デーリー東北記事 「『南部菱刺し』に保存策を」に「弘前のこぎんは保存対策がきちんとしているのに対して八戸地方のひしざしは、これといった保存対策もないままに、いつか消えるのではないか」と記載 (昭和43年10月30日掲載)		文化庁発足、文化財保護審議会設置、川端康成ノーベル文学賞	十勝沖地震津波、丸光百貨店・緑屋開店

元号年	西暦年	年齢	小井川の活動 南部菱刺し活動に相当するものは太字 (著者下線)	南部菱刺しの動き	こぎん刺しの動き	日本の動き	八戸の動き
昭和45	1970	82	『定本柳田國男集』月報に「柳田先生の見えられた前後」寄稿、上杉修が第12回青森県文化賞受賞(地方史)	大阪万国博覧会に日本民藝館は「日本民藝館」を出展。こぎん刺しと菱刺しも展示。こぎん刺し6点と菱刺し1点の古作に併せ、相馬貞三の尽力によるこぎん刺し1点、菱刺し8点の新作は、その後、日本民藝館の姉妹館としての大阪日本民藝館に所蔵される [9,p.523]	相馬貞三、第12回青森県文化賞受賞(民芸)[64] 東奥日報記事に、大阪で6月9日～13日こぎん菱刺し新作展を開催、相馬貞三が「こぎんとひし刺しについて」講演と記載 (昭和45年6月10日掲載) 有限会社弘前こぎん研究所 [9,p.496]、弘前観光工芸品制作販売協同組合設立[69,p.99]	三島事件、大阪万国博、田子ノ浦ヘドロ汚染、棟方志功文化勲章受章	八戸市民大学講座開設、長崎屋八戸店開店、八戸は「公害のデパート」と言われ翌年公害対策課設置、正部家種康『南部昔コ集』刊行
昭和47	1972	84				沖縄返還、列島改造論、日中共同声明、日中国交正常化	第一次八戸市総合計画策定、八戸初の四年制大学八戸工業大学開校
昭和49	1974	86	小井川死去		横島直道『津軽こぎん』刊行[75] [9, p.496]	国立民族学博物館設立、伝統的工芸品産業の振興に関する法律制定	

資料：「みちのくの造形 菱刺し編」・『小井川潤次郎著作集』・『青森県史』等をもとに筆者作成。

5.2 考察

表5について、表1～表4も参考にしつつ分析を行う。表2および表5により、小井川の活動、文献資料発表時期に二つの大きな山があることが分かる。よって昭和7年(1932)を中心とした1930年代を前期、「みちのくの造形 菱刺し編」連載時を中心とした1950年代～1960年代を後期とし、それぞれの年代について述べる。

(1) 前期 (1930年代)

小井川が南部菱刺しに着手したのは明治末(1910)頃である[50,p.7]。小学校教員として各校を巡るうちに「着物やこれにツギをあてる形、ツツレの刺し方などに気を付けた」[4,25]と述べており、地域に伝わる生活着の修繕技術に対する民俗的興味が発端と思われる。大正期初めには技術保持者に依頼して自身の衣類等の製作を開始している[4,28]。大正期は、南部地方でまだ麻作りや麻織りが行われており[9,p.469]、大正3～4年頃に流入した色毛糸を刺した多色前垂れが流行した時期である[66,p.47]。南部菱刺しを製作する人や着用する人がまだ地域に残っていた。大正期末には、小井川は勤務先の小学校教員を中心に、伝統技術の習得や製作などの復興活動を開始する [4,25]28、43,p.53]。

小井川は、それまで街中で「菱前垂姿」(南部菱刺しの前垂れを着用した人の姿)を見かけていた[34,p.56]が、昭和7年(1932)頃にはほとんど見られなくなり[35,p.7]、製作者はいたって稀である[48,p.6]と記している。昭和に入ると南部菱刺しが日常から急速に消え去っていったことがわかる。麻布の生産減や質の低下もこの時期から始まっている[4,32]。地域の伝統的手仕事が廃れていく状況を目の当たりにし、小井川は、自分や八戸郷土研究会が先導して復興活動に取り組まねばならないと考えるようになり[44]、滅びかけた南部菱刺しを後世に残すことに努めた[49]。

小井川はまず、柳宗悦の依頼により、昭和7年(1932)発行の雑誌『工藝』第14号、こぎん刺

し・南部菱刺し特集号に「南部の『菱ざし』」を執筆し、南部菱刺しについて紹介した[43,pp.51-57]。「ヒシザシが文字になって世間に出たこれが最初かもしれない」[4,⑳]と後年、新聞記事に記している。『工藝』第14号で、柳は、南部菱刺しを「地方的な日本刺繍として、之程多彩な美しい品を私は見た事がない。知らなければ、スカンティナピアあたりのもと思ふであらう」[43,p.8]、こぎん刺しを「名も無い津軽の女達よ、よく是程のものを遺してくれた。(中略)その虐げられた禁制の中で是程の美しいものを産んでくれた」[43,p.7]と評し、その美しさを称えている。また、「『こぎん』は他の國で生ひ立つ機縁を有たない」[43,p.3]、「数が合へば美は整ふ」[43,p.4]、「布目を拾つては丁寧に穴を埋める(中略)繕いがそのまま模様」[43,p.6]、「その美しさは用に發し法に根ざしてゐる」[43,p.7]などと述べ、こぎん刺しや南部菱刺しの美しさは、青森という地域性や衣服修繕の必要性から発生し、数的秩序に則ったものであると分析している。こうした柳の評価に対し、小井川は、「『工藝』が今日は『津軽刺こぎん』と『南部の菱刺』で一冊を作つて呉れてゐる(『工藝』第14号を指す)。そしてこれらのものの美しさ、良さ、といふものを推稱している。私たちの眼のとどかないそれを、言ひ表せないそれを明確に示して呉れてゐる」と述べている[44]。地元で自覚されない伝統文化の価値を、民藝運動の柳らが明確に評価したことが、小井川の復興活動の原動力となったことを示している。

小井川は南部菱刺しの復興活動として、まず技術継承と後進教育を推進した。「みちのくの造形菱刺し編」第28回に「下長苗代小学校校長になったのが大正13年、女の先生に手を付けるように勧めたのがこの時」[4,⑳]と、南部菱刺しの技術習得を同僚の女性教員に推奨したことが記載されている。同様の内容が「ひしざしー菱刺繍」にもあり、「館、上長、下長三村連合学事会で同僚の工藤テツが『菱刺について』を研究発表したのが此土地では最初かも知れない」と記載されている[50,p.7]。この際、刺し方の表も発表された。第30回に「梅の花」の刺し方表が紹介されており、アチックミュージアム『民具問答集』にもこの表とグラフが掲載された[48,pp.13-14]。

その後、下長苗代や館村から刺し手の女性を講師として招き、八戸郷土研究会による「菱刺しほどきの会」を昭和7年(1932)7月17日・24日に開催するという告知記事が、それぞれ同年7月13日・22日付『奥南新報』に掲載された[45]。7月13日付の記事には、菱刺しを農村の副業としようと考えたが、農村自体の状況が厳しいため、まずは八戸市内で技術を伝え、農村に波及させようという小井川の意図が述べられている。また、小井川は「菱刺しほどきの会」に先んじて開催を計画した「工藝展覧會」について、同年2月25日・28日付『奥南新報』に「工藝展覧會を開くについて」を掲載し、開催目的を「凶作・不況対策の第一のものと考えた」[44]と述べている。八戸市を含む南部地方はたびたび凶作に見舞われ、農村地帯の貧困が社会問題となっていた。大正2年(1913)の大凶作を契機に東北振興會が発足し、昭和6年(1931)冷害による大凶作で深刻な被害が生じたため、第二次東北振興會の活動が本格化している。こうした状況下で、小井川は農村の窮状解決の一助として伝統的手仕事を副業として活用することを考えたのだろう。

これに先んじた人に津軽の大川亮がいる。大川は、大正4年(1915)農閑工芸研究所を創設し、津軽地方の伝統工芸品のこぎん刺しやオリゲラ、樹皮ツル籠の技術保存に努め、農民に伝統工芸品を副業として製作する指導を行った。大正14年(1925)には、全国副業展に農閑工芸研究所の作

品を出品、入賞を果たすなど成果を上げていた[63,pp.34-35]。「工藝展覽會を開くについて」に、大川をはじめとして、杉山寿栄男、芹沢銈介、村岡景夫、柳宗悦らとの交流が契機になったことが記されている[44]。また、明治末から昭和初期にかけては、柳田國男の民俗学、新渡戸稻造の郷土研究、山本鼎の農民美術、宮沢賢治の農民芸術など地方へのまなざしが強化された時期ともいえる。「教育の郷土化とか、郷土教育とかいふ流行言葉でなしにそれを地で行かうとするそれであつた」[44]と記していることから、小井川はこれらの動きを意識し、その影響を受けたものと考えられる。

「工藝展覽會を開くについて」の中で、小井川は一連の活動の意図を述べている。南部地方の菱刺し、裂織、久慈焼など「私たちの手、手の工藝といったものの傳統は、どうかすると中絶されそうな状態にある」[44]とし、「今にしてこれに息を吹きかけて置かねば再び起つ時期を失ひさうだ」[44]との危機感のもと、八戸郷土研究会とともに自ら率先して行動を起こすと宣言している。そして小井川は、「私たちには私たちの持つてあるものの、美しさも、良さ、も解らないやうであつた」、「土地の物には手をつけようとしなさい」、「自分の物は使はなかつた」[44]という地元の傾向を憂え、地元の人が目を向けない「土地の物」の美しさや良さに対して、むしろ他所の人や旅の人の方が評価する傾向を指摘している。小井川は、南部菱刺しをはじめとする「土地の物」を、地域の産物として地元の産業振興にどのように活かしたらよいか考えるようになった。

小井川はこの時期に、製品開発や東京方面への販売活動や国画展覽會への出品など、中央圏に向けての活動を積極的に行う。これには民藝運動の柳宗悦らの関与が大きい。東京向け新製品開発・製作において、柳は菱刺しの技法を応用した新作を送るよう指示している。柳は小井川宛書簡の中で、「新工風のもの（中略）何れも他の傳統的なものに比し甚しく見劣りします、創作でいゝものを得るのは中々困難故、やはり、在來のやり方を活かす様にする方無難かと思ひます」[40,p.483]、「今後菱刺の素地の色はなるべく濃い紺（黒に近い）を使つて被下いませんか、それに白や淡藍の糸で刺す方ずつと効果がいゝので」[40,p.484]などの助言を与えている[9,p.504]。「みちのくの造形 菱刺し編」第32回には、座布団・花瓶敷・手文庫・掛け鏡台・財布・がまぐち・卓布など生活雑貨に菱刺しを施した新製品を手掛けたこと、銀座の民芸店「たくみ」に製品を出していたこと、戦争中も何度も上京をしていることを記している[4, ③]。相馬貞三が「菱刺のこと一その展観に寄せて一」で、「製品を出して市販までこぎつけたのは菱刺がさきであつて、こぎん刺は戦後までその面での動きは活撥ではない」[74,p.4]と指摘するように、販路拡大という点では南部菱刺しの方がこぎん刺しに先行していた。

この時期、八戸市では観光協会設立、種差海岸の国の名勝指定など観光に関連した動きがあり、小井川の中央圏に向けた活動の背景との関連性が指摘できる。鉄道路線の発達により、大正から昭和にかけて、全国的な旅行ブーム、観光ブームが起こった。このブームによって、各地の資源が掘り起こされ、地方の自然や文化などが観光客の消費対象となる時代を迎えようとしていた[68,p.46]。昭和12年(1937)版の『八戸商工案内』には八戸の特産物として、八幡馬、えんぶり人形、八戸煎餅、菊羊羹、むし菊、うに缶詰、いか徳利が挙げられ、南部菱刺しは含まれていなかった[70,p.16-21]が、この観光ブームも復興活動を取り巻く当時の社会的背景の一つと考えてもよいだろう。

こうした小井川の活動が周囲に波及したのか、昭和7年(1932)上北町の米内山義一郎と七戸の

戸館第次郎が、地元集落の婦人七十数名で菱刺し協会を結成し、復興活動を開始した。農閑期に都市部向け製品を製作し、生産額 2,000 円を超えたと記録されている[9,p.498]。「みちのくの造形 菱刺し編」第 32 回に「七戸の戸館第次郎さんが『たくみ』にテーブルセンターを送り出したのが、だいたいが私のまね、馬具を作る麻布であら目、できが悪かった」[4,⑳]とあるように、小井川は戸館が製作販売する製品の質には不満だったようだが、米内山や戸館との交流を通して、七戸や三沢で作品資料を見るようになり、特に南部菱刺しとこぎん刺しの発祥に関するそれまでの自身の仮説を改めたようだ。

当初小井川は、地刺しであるアヤスギとタテアヤスギの造形上の相違を南部菱刺しとこぎん刺しの発生に結び付けて考えていた。「ひしざしー菱刺繻」では「地刺のアヤスギが一幅の横に小さな菱を列べたのがヒシザシ、タテアヤスギを地刺にした布地を縦に大きな菱を描きこの内外を小さな菱、または方形な文様を参差組入れたのがコギンであろう」[50,p.7]、「ヌノツツレ・コギン・ヒシザシ」では「コギンはタテアヤスギから生まれる大小交錯した菱形を基調とした複合文様、ヒシザシは横地のアヤスギから作られた小さな菱形の連続」[22,p.30]と記述しているところにも、小井川のこの仮説が伺える。図形的にみた菱形発生の仮説である。なお、「ひしざしー菱刺繻」引用文内の「参差組入れた」という表現は分かりにくいだが、『日本国語大辞典』によれば、「参差」は「しんし」と読み、「高さや長さが異なっていて、そろわないこと。互いに入り交じっていること」という意味である。よって、引用文の該当箇所は「様々な大きさや形の菱模様が不揃いに並んでいること」を指していると解釈する。

しかし、米内山らとの交流で作品資料を調査する範囲が拡大したことにより、後年この推測を修正した。「みちのくの造形 菱刺し編」で「七戸で物を見、三沢で物を見るとこの考え方があぶなくなってきた」[4,㉑]と述べ、「そのむかしヒシザシとコギンの発祥を南部と津軽と別々に考えたことは私の間違いだった。(中略)あの山脈を境に伸び方、育ち方が異なっただけだといまは考えている」[4,㉒]と記している。きっかけは「よく使いこなしたヒシザシのタテアヤスギの前だれを一枚手に入れてから」[4,㉓]のようだ。

小井川が閲覧した作品資料一覧や閲覧歴は調査した文献資料にはなかった。どのような作品資料(特に古作)を、どこで、どのような順番で調査して上記の仮説を構築し、さらに仮説の修正に至ったのかは不明である。しかし、閲覧した作品資料の地域や品目によって小井川の南部菱刺しに対する見方が変化した点が興味深い。この点は、南部菱刺し模様の造形上の特色や刺しの技術的な問題に関わる考察として別稿で改めて検討したい。

(2) 後期 (1950.1960 年代)

精力的に活動した小井川は、その後南部菱刺しから手を引くようになる。昭和 7 年 (1932) 7 月 17 日付『奥南新報』に「(菱刺し講習会はこの後有志に組織化してもらったら)私と菱刺の縁切りかも知れません」[45]といった記述がすでにみられる。昭和 37 年 (1962) 開始の「みちのくの造形 菱刺し編」は小井川が南部菱刺しから手を引いて久しくなってから書かれたもので、最終回は「私のヒシザシ供養のためにである」[4,㉔]と締めくくっている。

手を引いた正確な時期について小井川は明確にしていないが、表5をみると、積極的な活動が見られなくなったのは活動前期の直後と思われる。別稿「ひしぎしー菱刺繍」で「そのころ既に麻布が少なくなっていたし目の荒い物だけで、菱が菱にならず四角になった。私はそれなり手を引いてしまっていた」[50,p.7]と良質な麻布の供給不足が要因としている。相馬貞三が「菱刺のこーその展観に寄せて一」に「東京にも製品を出したが、事情あってその後ふるわなくなつた」[74,pp.4-5]と活動不振について記している。最も大きな要因は、昭和14年(1939)の第二次世界大戦の勃発と、それに伴う物資不足であろう。

戦後から高度経済成長期にかけて木綿や合成繊維の生産が急速に伸びている。昭和23年(1948)大麻取締法による麻栽培の禁止により、昔ながらの麻布の確保は相当困難だったに違いない。「みちのくの造形 菱刺し編」で「地布が荒くぴんとしまっていない」[4,③]、「布地が戦後のもので危なっかしい」[4,⑳]などと指摘する小井川は、時代が下るにつれて目立つ麻布の品質低下により、伝統的な横長菱模様の維持が困難になったことを南部菱刺しの伝統存続の危機ととらえていたと思われる。経糸と横糸が均一に織られた麻布でなければ、横長菱模様の形が崩れるのである。

また、伝統重視の小井川は菱の形が崩れている作品に対し伝統保護の観点から強く異議を唱えているが、こうした若い刺し手の「近代感覚」による模様の崩れに対する違和感、よりおおまかにいえば地方の近代化に伴う地元の人々の感覚の変容に対する違和感が強かったのだろう。「土地の人たちは新しい方向へ向いて行ってしまい」[4,㉔]、「(菱刺しやこぎん刺しを防空頭巾にしたのを見て「もったいない」と言った人がいたが) こういうのはよその人、他国の人、土地の人が土地の良さも味もわからないのはきのどくだった」[4,㉔]と述べている。地元の人々の志向の変化や時代感覚に応じた新しい意匠の発生は、小井川の目には、形の崩れや伝統からの逸脱に映ったのだろうか。小井川は地元の人々の南部菱刺しへの関心の低さや、伝統的手仕事が地域の実生活が離れていく状況を嘆いている。昭和39年(1964)「ひしぎしー菱刺繍」では「津軽のコギンがしきりと叫ばれ出しから、南部でもヒシザシに手をつける人が多くなって来、ヒシザシを身につけた紳士淑女を店頭、街上でよく見かけた。が、それはわたしの言うヒシザシとは多少異なっていた」(筆者下線)[50,p.7]と述べている。復興活動後期に目にした南部菱刺しは、もはや小井川が思い描くあるべき南部菱刺し、かつての南部菱刺しから変容していたということか。

こうした南部菱刺しを取り巻く時代変化が、複合的に小井川の関心が南部菱刺しから離れる要因になったと考えられる。時代に合わせた新しい創作がなければ、伝統の継承は難しい。伝統の保護継承と時代対応の問題は、南部菱刺しに限らず、伝統工芸全般に当てはまり、現代でもなお解決しがたい難しさがある。南部菱刺しのような生活の便に応じて流動的に変化してきたものは、技法の伝統の基点を定めがたいのも事実である。復興活動に携わった小井川の取り組みや考え方を踏まえ、今後、南部菱刺しの伝統をどうとらえ、継承していくのかについて改めて検討すべきである。

小井川の専門は民俗学である。終戦後、昭和21年(1946)以降、60歳を前にして、八戸郷土叢書として自分の論考を次々刊行し、民俗学の学究成果の総括を行っている。小井川は南部菱刺し研究に関しても、昭和33年(1958)の「青森風土記」収録小文[22]、昭和37年(1962)の「布目を追うてーヒシザシ雑記」[49]、「みちのくの造形 菱刺し編」[4]、昭和39年(1964)の『八戸の民

芸』収録小文[17]で総括を行った。「着物やこれにツギをあてる形、ツヅレの刺し方などに気を付けた」[4,②]ことを契機に南部菱刺しに興味を寄せ、「私はもともと滅びかけたヒシザシをのこすことにつとめた。これはヒシザシばかりでなく八幡馬でもセンベイでも久慈焼でも同じことだった」(筆者下線) [49]という記述がある。民俗学者らしい小井川の南部菱刺し研究動機である。南部菱刺しは民俗学者小井川の研究の本流ではなかった。おそらく研究対象のごく一部であったろう。たとえば、村岡景夫著『津軽のこぎん』[71]、高橋一智著「みちのくの造形 刺しこぎん編」[73]、横島直道著『津軽こぎん』[75]など民藝運動・工芸研究者によるこぎん刺し文献資料に比べ、小井川の南部菱刺し文献資料は数や分量が少なく、研究資料として不十分な点がある点は否めない。

しかし、小井川の活動が、①南部菱刺しとして初の取り組みであったこと、②講習会開催など技術保持者が伝統技術を伝える場を設けたこと(後年、菱刺し教室を主宰する西野こよは、この時の指導者である工藤てつから技術を教わっている[9,p.501])、③教育会や商工会をも巻き込んだ動きを企図したことは、南部菱刺しの復興、特に後進育成面で大きな意味を持つと考える。なお、「みちのくの造形 菱刺し編」連載とほぼ同時期の新聞記事(『デーリー東北』ほか)に、八戸市や市商工会議所が主導し菱刺し講習会を開催したこと、八戸市物産協会がヒシザシ研究会(仮称)を結成し教材開発に着手したことなど、小井川の復興活動の影響を受けたと思われる新しい動きが複数見える。小井川以降の復興・継承活動の詳細に関しては今後も調査を継続していく。

6. おわりに

本研究では、小井川の文献資料、特に東奥日報連載「みちのくの造形 菱刺し編」を中心に分析を行い、小井川の南部菱刺し復興に関わる活動全般について考察を行った。小井川は、明治末頃から南部菱刺し研究に着手し、作品収集、製作、技術伝達、後進育成、製品開発、販路拡大など多岐にわたる活動を推進するなど、南部菱刺し復興に功績が大きいことがその著作物を通じて明らかになった。また、活動年表により他の動向と比較することで、小井川の活動は、中央や津軽など幅広い人的交流によって促進されたこと、殖産興業、凶作、戦争、高度成長などの社会動向やそれに伴う地方の変化の影響を受けていたことが見出された。

小井川は地域の産業振興策として南部菱刺し復興に取り組んだが、小井川の活動を産業化につなぐ活動母体は地元生まれなかった。また、若い製作者層を中心に製作志向が変化したこと、農村における麻布の自給自足生活が昭和初めでほぼ消滅し良質な麻布生産が減少したことは、南部菱刺しの様相を大きく変えた。こうした傾向は小井川が重視する南部菱刺しの「形を崩さず伝統をそのまま維持する」姿勢と齟齬をきたした。生活文化や人々の価値観の変容に伴い、昔からある「土地の物」の良さが顧みられなくなる風潮が強まり、地元の産物や伝統技術を活用しようとする地元意識の弱さと相まって、小井川が南部菱刺しから手を引く要因となったと推察される。

以上を整理すると、小井川が復興活動を行っていた当時の南部菱刺しを取り巻く状況の課題として、①組織化された生産販売母体の問題、②生産を支える材料供給の問題、③伝統の保護継承と時代対応の問題、④伝統技術に対する地元認知の問題が浮かび上がってくる。これらは、現代の南部

菱刺しの問題として根本的に変わっていない。今後は、未見資料を中心に小井川の活動に関する調査・分析を継続するとともに、小井川以降の南部菱刺しに関わる動きを年次的に整理し、上記①～④の問題がどのように扱われてきたかについて考察する予定である。

本研究にあたって、公益財団法人インテリジェント・コスモス学術振興財団による第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞助成を受けている。

また、調査研究にご協力くださいました関係各位、特に、新聞資料をご提供くださいました東奥日報社、青森県の民藝に関して貴重なご教示を賜りましたつがる工芸店の會田秀明氏、會田美喜氏に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 青森県庁 商工労働部 地域産業課「青森県の伝統工芸品 南部菱刺し」：
https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/shoko/chiikisangyo/aomori_dento-kogei_nanbuhishizashi.html (2023年1月11日アクセス)
- 2) 日本民藝協会「民藝とは何か」：<https://www.nihon-mingeikyokai.jp/about/> (2023年1月11日アクセス)
- 3) 八戸市役所 社会教育課「八戸市ゆかりの先人たち 小井川潤次郎」：
<https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/shakaikyoikuka/bunka/1/5436.html> (2023年1月11日アクセス)
- 4) 小井川潤次郎：みちのくの造形 菱刺し編，東奥日報社，1962-1963。（東奥日報社提供）
- 5) 青森県史編さん民俗部会：青森県史 民俗編 資料南部，青森県，2001.
- 6) 青森県史編さん近現代部会：青森県史 資料編 近現代4，青森県，2005.
- 7) 青森県史編さん近現代部会：青森県史 資料編 近現代5，青森県，2009.
- 8) 青森県史編さん近現代部会：青森県史 資料編 近現代7，青森県，2016.
- 9) 青森県史編さん文化財部会：青森県史 文化財編 美術工芸，青森県，2010.
- 10) 青森県史デジタルアーカイブシステム：<https://kenshi-archives.pref.aomori.lg.jp/contents/kenshi-front/> (2023年1月11日アクセス)
- 11) 青森県人名大事典編さん室：青森県人名大事典，東奥日報社，1969.
- 12) 八戸近代史研究会：きたおうう人物伝 近代化への足跡，デーリー東北新聞社，1995.
- 13) 青森地域社会研究所編集：青森県の一〇一人，北の街社，1988.
- 14) 山根勢五：〈はちのへ・るねさんす〉の風景，デーリー東北新聞社，2012.
- 15) 島守光雄：母校賛歌 八戸高校物語，北方新社，1996.
- 16) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第1巻，伊吉書院，1977.
- 17) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第2巻，木村書店，1990.
- 18) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第3巻，木村書店，1990.
- 19) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第4巻，木村書店，1991.
- 20) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第5巻，木村書店，1992.
- 21) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第6巻，木村書店，1993.
- 22) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第7巻，木村書店，1994.
- 23) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第8巻，木村書店，1995.
- 24) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第9巻，木村書店，1996.
- 25) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第10巻，木村書店，1997.

- 26) 小井川潤次郎：小井川潤次郎著作集第11巻，木村書店，1998.
- 27) 小井川潤次郎著・江刺家均校訂：稿本 小井川潤次郎遺文 全3篇，春秋堂出版部，2007.
- 28) 江刺家均：小井川潤次郎序説（『謔浪時代』1～11号），グループ謔浪時代，1983-1985.
- 29) 中里進編集：北方春秋15号，北方春秋社，1964.
- 30) 小井川潤次郎：八戸の四季，北方春秋社，1961.
- 31) はちのへヒストリア：<https://historia8.org/>（2023年1月11日アクセス）
- 32) 川守田礼子：南部菱刺しの現状と課題―地域の伝統文化の継承と活性化に向けて―，八戸工業大学紀要，39巻，pp.11-22，2020.
- 33) 柳田国男：木綿以前の事，岩波文庫，1979.
- 34) CiNii：<https://ci.nii.ac.jp/>（2023年1月11日アクセス）
- 35) 国立国会図書館サーチ：<https://iss.ndl.go.jp/>（2023年1月11日アクセス）
- 36) 青森県立図書館：<https://ci.nii.ac.jp/>（2023年1月11日アクセス）
- 37) 八戸市立図書館：<https://iss.ndl.go.jp/>（2023年1月11日アクセス）
- 38) 八戸工業大学図書館：<https://ci.nii.ac.jp/>（2023年1月11日アクセス）
- 39) 川守田礼子：青森県の刺し子「南部菱刺し」に関する文献研究，八戸工業大学紀要，40巻，pp.25-33，2021.
- 40) 柳宗悦：柳宗悦全集21上，筑摩書房，1989.
- 41) 柳宗悦：柳宗悦全集21中，筑摩書房，1989.
- 42) 陸奥郷土会：郷土誌むつ，国書刊行会，1983.
- 43) 柳宗悦：工藝 第14号，聚楽社，1932.
- 44) 小井川潤次郎：工藝展覧會を開くについて，奥南新報，1932.
- 45) 小井川潤次郎：菱刺しほどきの會―八戸郷土研究会―，奥南新報，1932.
- 46) 小井川潤次郎：縦と横と―菱刺し小考―，奥南新報，1932.
- 47) 小井川潤次郎：久慈焼の事から―頒布會のこと―，奥南新報，1932.
- 48) アチックミュージアム：民具問答集，丸善，1937.
- 49) 小井川潤次郎：布目を追うて―ヒシザシ雑記―，東奥日報社，1962.
- 50) 小井川潤次郎：ひしざし―菱刺し―，八戸の民芸 文化財シリーズ4，八戸市教育委員会，1964.
- 51) 小井川潤次郎：ひしざし―菱刺し―，みちのく民芸 第12号，青森県民芸協会，1967.
- 52) 本山桂川：生活民俗図説，八弘書店，1943.
- 53) 古里淳：中居林の民俗（その2），八戸市博物館研究紀要，第13号，八戸市博物館，1998.
- 54) 田中忠三郎：南部つづれ菱刺し模様集，北の街社，1977.
- 55) 八田愛子・鈴木堯子：菱刺し模様集，菱刺し模様集刊行会，1989.
- 56) 西野こよ：南部菱刺し，菱刺し館，2007.
- 57) 東奥日報：青森県の民芸，東奥日報社，1971.
- 58) 渡部高明監修：続きたおう人物伝 近現代の歩み，デーリー東北新聞社，2021.
- 59) 草木工房 山崎家と草木染：https://yamazaki-kusakizome.com/?page_id=19（2023年2月17日アクセス）
- 60) 青森県文化財保護協会八戸支部：奥南史苑，国書刊行会，1989.
- 61) 青森県史編さん民俗部会：青森県史 民俗編 資料津軽，2014.
- 62) 八田愛子・鈴木堯子：新技法シリーズ 改訂新版菱刺しの技法，美術出版社，1992.
- 63) 青森県立郷土館：特別展「大川亮と農村工芸」，青森県立郷土館，1996.
- 64) つがる工芸店 相馬貞三略歴：<http://www.komakino.jp/tugaru/teizo.html>（2023年2月17日アクセス）
- 65) 民俗民具研究所：津軽、南部のさしこ着 国指定、重要有形民俗文化財，民俗民具研究所，2000.

- 66) 田中忠三郎：南部菱刺考，季刊染織と生活，No.16，pp.42-48，1977.
- 67) 青森県史編さん近現代部会：青森県史 資料編 近現代3，青森県，2004.
- 68) 東京国立近代美術館ほか編，図録 柳宗悦没後60年記念展 民藝の100年，東京国立近代美術館ほか，2021.
- 69) 濱田淑子：津軽こぎん・南部菱刺し—工芸美の発見から再興のみちすじ—，『青森県史研究』，7号，pp.84-105，2002.
- 70) 八戸商工会：八戸商工案内 昭和12年版，八戸商工会，1923.
- 71) 村岡景夫：津軽のこぎん，日本民藝協會「工藝」編集室，1943.
- 72) 山根勢五：〈はちのへ・るねっさんす〉の時代，はちのへ市史研究，第7号，八戸市史編纂室・八戸市，pp.64-74，2008.
- 73) 高橋一智：郷土資料集 みちのくの造形 刺しこぎん [1] 基礎模様・単位の形成法，弘前市立博物館，1996
- 74) 相馬貞三：菱刺のこと—その展観に寄せて—，みちのく民芸 第12号，青森県民芸協会，pp.4-9，1967.
- 75) 横島直道：津軽こぎん，日本放送出版協会，1974.

要 旨

青森県南部地方の南部菱刺しは、農村の衣生活を支えた伝統的手仕事である。明治以降の近代化に伴い消滅の危機に瀕するも、民藝運動の影響を受けた地元有志の尽力のもと復興を遂げた。本稿では、復興活動初期の中心的人物である小井川潤次郎の文献資料、特に東奥日報連載「みちのくの造形 菱刺し編」を中心に分析を行い、昭和年代の青森県南部地方の衣生活と南部菱刺しの変容の様相および小井川潤次郎の取り組みの意義について探る。

キーワード：小井川潤次郎，南部菱刺し，復興活動，文献資料，衣生活文化